

平成16年度  
神戸市埋蔵文化財年報



2007  
神戸市教育委員会

平成16年度  
神戸市埋蔵文化財年報

2 0 0 7

神戸市教育委員会



fig. 1 神戸臨港鉄道南本町架道橋台跡



fig. 2 兵庫津遺跡 第33次調査



fig. 3 兵庫津遺跡 第35次調査



fig. 4  
石峯寺坊院跡



fig. 5  
同 出土遺物



fig. 6 兵庫松本遺跡 第19次調査 出土遺物

## 序

本年度、神戸市では国の史跡として舞子砲台跡と五色塚古墳の外溝部分が指定されました。一昨年、平成17年3月の西求女塚古墳の指定につづき大変よろこばしいことです。

今後は、これら国民共有の財産ともいるべき史跡をいかに整備し、有効に活用していくか、みなさまと共に考えていきたいと思います。

さて、今回報告いたします平成16年度は、港町神戸の近代化を支えた神戸臨港鉄道南本町架道橋台跡の調査や、兵庫城と町屋の成り立ちを解明する手がかりとなる兵庫津遺跡における一連の調査など、多くの貴重な成果がみられました。

これらの遺跡をはじめ本書に掲載されました調査の成果をとおして埋蔵文化財へのご理解を深めていただければ幸いです。

最後に、調査および本年報を作成するにあたりましてご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

神戸市教育委員会

# 例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成16年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財保護審議会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

## 調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会	(史跡・考古資料担当)
榎　上　重　光	前　神戸女子短期大学教授
工　楽　善　通	大阪府立狭山池博物館館長
和　田　晴　吾	立命館大学文学部教授

## 教育委員会事務局

教　　育　　長	小川 雄二
社　会　教　育　部　長	高橋英比古
参事（文化財課長事務取扱）	桑原 泰豊
主幹（埋蔵文化財調査係長事務取扱）	渡辺 伸行
事務担当学芸員	山本 雅和
	佐伯 二郎
	橋詰 清孝
	井尻 格
埋蔵文化財調査係長	丹治 康明
文　化　財　課　主　査	丸山 潔
	菅本 宏明
事務担当学芸員	東 真代秀
調査担当学芸員	谷 正俊
	須藤 宏
	山口 英正
	内藤 俊哉
	浅谷 誠吾
	藤井 太郎
	関野 豊
	阿部 功
	中村 大介
	平田 明子
	中谷 正
	中居さやか

上野（埋蔵文化財センター所長事務取扱）

宮木 郁雄

西岡 誠司

斎木 岩

川上 厚志

(財) 神戸市体育協会

会 長 矢田 立郎

副 会 長 矢野栄一郎

常 務 事 廉 野浪 建作

総 務 課 長 横関 勇

総務課主査（兼務） 菅本 宏明

調査担当学芸員 黒田 恒正

安田 澄

阿部 敏生

2. 本書に記載した位置図は、神戸市立中学校教育研究部編集（神戸市体育協会発行）5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2500分の1地形図を使用した。

3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、I. 平成16年度事業の概要については横詰 清孝・西岡 誠司が、II. 震災復興調査の10年については渡辺 伸行が、V. 保存科学調査・作業の概要については山村 大介が執筆した。また編集については、渡辺 伸行の指導のもとに内藤 俊哉が行った。

4. 市内各遺跡の調査次数については、現在改正作業中である。

5. 表紙写真は兵庫津遺跡 第36次調査（本文183頁）出土の陶磁器で、裏表紙写真は兵庫松本遺跡 第20次調査（本文79頁）出土の玉類である。

# 目 次

## 序 例言

I.	平成16年度 事業の概要 .....	1
	平成16年度 埋蔵文化財発掘調査一覧 .....	11
	平成16年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図 .....	15
II.	震災復興調査の10年 .....	21
III.	平成16年度の復興事業に伴う発掘調査	
1.	森北町遺跡 第21次調査 .....	25
2.	森北町遺跡 第22次調査 .....	27
3.	森南町遺跡 第3次調査 .....	29
4.	本山北遺跡 第3次調査 .....	37
5.	扁保曾塚古墳 第2次調査 .....	39
6.	住吉宮町遺跡 第39次調査 .....	41
7.	都家遺跡 第77次調査 .....	43
8.	日暮遺跡 第22次調査 .....	45
9.	神戸臨港鉄道南本町架道橋台跡 第1次調査 .....	47
10.	神戸臨港鉄道小野浜町下水道跡 第1次調査 .....	61
11.	熊内遺跡 第6次調査 .....	65
12.	楠・荒田町遺跡 第32次調査 .....	67
13.	楠・荒田町遺跡 第33次調査 .....	71
14.	祇園遺跡 第11次調査 .....	73
15.	祇園遺跡 第12次調査 .....	75
16.	兵庫松本遺跡 第18・20～23次調査 .....	79
17.	兵庫松本遺跡 第19次調査 .....	89
18.	兵庫沖遺跡 第33次調査 .....	91
19.	兵庫津遺跡 第34次調査 .....	97
20.	石峯寺坊跡 第1次調査 .....	105
21.	淡河城跡 第3次調査 .....	113
22.	小部北ノ谷遺跡 第3・4次調査 .....	115
23.	御藏遺跡 第54・55次調査 .....	121
24.	松野遺跡 第39次調査 .....	127
25.	大橋町遺跡 第1次調査 .....	129
26.	二葉町遺跡 第18次調査 .....	131

27. 戎町遺跡 第56－2次調査	135
28. 戎町遺跡 第57次調査	139
29. 戎町遺跡 第58次調査	141
30. 戎町遺跡 第59次調査	145
31. 舞子窓台跡 第4次調査	151
32. 西区No.151遺跡 第1次調査	153
IV. 平成16年度の通常事業に伴う発掘調査	
1. 西郷占酒藏群 第3次調査	155
2. 西求女塚古墳 第15次調査	167
3. 口巻遺跡 第23次調査	169
4. 雲井遺跡 第19次調査	171
5. 兵庫松本西遺跡 第1次調査	175
6. 大開遺跡 第11次調査	177
7. 大開遺跡 第12次調査	179
8. 兵庫津遺跡 第35次調査	181
9. 兵庫津遺跡 第36次調査	183
10. 上沢遺跡 第52次調査	185
11. 中遺跡	187
12. 野瀬遺跡 第5次調査	191
13. 行幸町遺跡 第5次調査	193
14. 飛松町遺跡 第1次調査	201
15. 寒鳳遺跡 第9次調査	207
16. 今津遺跡 第17次調査	209
17. 居住遺跡	213
18. 玉津田中遺跡	217
V. 平成16年度の保存科学調査・作業の概要	
	219

# 挿図目次

fig. 1	神戸臨港鉄道南本町架道橋台跡〔写真〕	卷頭	fig. 45	調査区平面図	46
fig. 2	兵庫津遺跡 第33次調査〔写真〕	卷頭	fig. 46	調査区南壁断面模式図	46
fig. 3	兵庫津遺跡 第35次調査〔写真〕	卷頭	fig. 47	S D01出土遺物実測図	46
fig. 4	石峯寺坊跡 第1次調査〔写真〕	卷頭	fig. 48	調査位置図1:2,500	47
fig. 5	同 出土遺物〔写真〕	卷頭	fig. 49	第1橋台(東)立面図	48
fig. 6	兵庫松木遺跡 第19次調査 出土遺物〔写真〕	卷頭	fig. 50	第1橋台(西)平面図・立面図	49
fig. 7	企画展示『遺跡のお医者さん』〔写真〕	x	fig. 51	第1橋台南側石垣 立面図	49
fig. 8	企画展示『講演会落成に見る庶民の暮らし』〔写真〕	x	fig. 52	第2橋台(東)平面図・立面図	50
fig. 9	出張講座 須磨バティオ 勾玉づくり〔写真〕	x	fig. 53	第2橋台(西)平面図・立面図	51
fig. 10	出張学校展示〔写真〕	x	fig. 54	第2橋台南側石垣立面図	51
fig. 11	「ホンモノとの出会い」「甲冑を見てみよう」〔写真〕	x	fig. 55	第4橋台平面図・立面図	52
fig. 12	第2回 みどりと太陽のまつり〔写真〕	x	fig. 56	第1橋台(四)前面根石横〔写真〕	54
fig. 13	煉瓦下水道跡切り取り〔写真〕	9	fig. 57	第1橋台(西)背面根石横〔写真〕	54
fig. 14	古代大輪印泊の石掠モニュメント〔写真〕	9	fig. 58	第1橋台全景〔写真〕	55
fig. 15	まちかどギャラリー〔写真〕	24	fig. 59	第2橋台(東)〔写真〕	56
fig. 16	シンポジウム「震災が明らかにした歴史」〔写真〕	24	fig. 60	第2橋台(西)〔写真〕	56
fig. 17	調査位置図1:2,500	25	fig. 61	第1・2橋台南側石垣平面図	57
fig. 18	調査区平面図・断面図	26	fig. 62	第1橋台南側石垣〔写真〕	58
fig. 19	第2橋横面全景〔写真〕	26	fig. 63	第2橋台南側石垣〔写真〕	58
fig. 20	調査位置図1:2,500	27	fig. 64	第3橋台(東)〔写真〕	59
fig. 21	調査区平面図・断面図	28	fig. 65	第3橋台(西)〔写真〕	59
fig. 22	調査位置図1:2,500	29	fig. 66	第4橋台(東)〔写真〕	60
fig. 23	調査区配図図	29	fig. 67	第4橋台(西)〔写真〕	60
fig. 24	第3-1次調査区全景〔写真〕	30	fig. 68	調査位置図1:2,500	61
fig. 25	第3-1次調査区平面図・断面図	30	fig. 69	水路部分(内部)〔写真〕	62
fig. 26	第3-2次調査区平面図・断面図	31	fig. 70	水路内 開石・煉瓦〔写真〕	62
fig. 27	第3-2次調査区全景〔写真〕	32	fig. 71	煉瓦刻印〔写真〕	62
fig. 28	第3-3次調査区断面図	33	fig. 72	水路 平面図・立面図	63
fig. 29	第3-3次調査区平面図	35	fig. 73	水路部分(上面)〔写真〕	63
fig. 30	第3-3次調査区全景〔写真〕	36	fig. 74	水路軌体背面〔写真〕	64
fig. 31	調査位置図1:2,500	37	fig. 75	調査地遺景〔写真〕	64
fig. 32	調査区平面図	38	fig. 76	調査位置図1:2,500	65
fig. 33	調査区全貌〔写真〕	38	fig. 77	S D01出土遺物実測図	65
fig. 34	調査区断面図	38	fig. 78	調査区平面図・断面図	66
fig. 35	調査位置図1:2,500	39	fig. 79	調査区全景〔写真〕	66
fig. 36	調査区平面図・断面図	40	fig. 80	調査位置図1:2,500	67
fig. 37	調査位置図1:2,500	41	fig. 81	南半調査区全景〔写真〕	68
fig. 38	調査区平面図・断面図	42	fig. 82	S D201〔写真〕	69
fig. 39	調査区全景〔写真〕	42	fig. 83	S B201〔写真〕	69
fig. 40	調査位置図1:2,500	43	fig. 84	調査区平面図	70
fig. 41	調査区平面図	44	fig. 85	調査区断面図	70
fig. 42	調査区断面図	44	fig. 86	調査位置図1:2,500	71
fig. 43	調査位置図1:2,500	45	fig. 87	調査区平面図	72
fig. 44	調査区全景〔写真〕	46	fig. 88	調査区全景〔写真〕	72

fig. 89	調査位置図 1 : 2,500	73
fig. 90	S X02 [写真]	74
fig. 91	調査区平面図	74
fig. 92	2号坑 [写真]	74
fig. 93	9号坑 [写真]	74
fig. 94	調査位置図 1 : 2,500	75
fig. 95	調査区平面図・断面図	76
fig. 96	S K04 [写真]	76
fig. 97	S B01(南部)遺物出土状況 [写真]	76
fig. 98	S B01(中~北部)遺物出土状況 [写真]	76
fig. 99	S X01 [写真]	77
fig. 100	S P02 [写真]	77
fig. 101	S P04 [写真]	77
fig. 102	調査区全景 [写真]	78
fig. 103	調査位置図 1 : 2,500	79
fig. 104	調査区配置図	79
fig. 105	調査区断面図	80
fig. 106	調査区平面図	80
fig. 107	S B103出土遺物実測図	81
fig. 108	S B107 [写真]	81
fig. 109	出土遺物実測図	82
fig. 110	調査区断面図	83
fig. 111	S B117 [写真]	84
fig. 112	S B120 [写真]	84
fig. 113	調査区平面図	85
fig. 114	調査区平面図・断面図	86
fig. 115	調査区平面図	88
fig. 116	調査区断面図	88
fig. 117	調査位置図 1 : 2,500	89
fig. 118	調査区平面図	90
fig. 119	1区 第1遺構面全景 [写真]	90
fig. 120	1区 第2遺構面全景 [写真]	90
fig. 121	調査位置図 1 : 2,500	91
fig. 122	第1遺構面平面図	92
fig. 123	第1遺構面(寺域南端境界溝) [写真]	92
fig. 124	第2・3遺構面平面図	93
fig. 125	調査区断面図	93
fig. 126	第2遺構面全景 [写真]	95
fig. 127	桶棺と妻棺 [写真]	95
fig. 128	桶棺 [写真]	95
fig. 129	五輪塔集積遺構 [写真]	95
fig. 130	墓坑 [写真]	95
fig. 131	調査地遠景 [写真]	96
fig. 132	調査位置図 1 : 2,500	97
fig. 133	調査区断面図	98
fig. 134	S K14・15 [写真]	99
fig. 135	調査区平面図	99
fig. 136	第2遺構面全景 [写真]	100
fig. 137	第1遺構面全景 [写真]	100
fig. 138	出土遺物実測図(1)	101
fig. 139	出土遺物実測図(2)	102
fig. 140	出土遺物実測図(3)	103
fig. 141	出土遺物実測図(4)	104
fig. 142	調査位置図 1 : 2,500	105
fig. 143	調査区平面図・断面図	106
fig. 144	調査区全景 [写真]	107
fig. 145	S X03 [写真]	107
fig. 146	礎石 [写真]	107
fig. 147	S X03を覆う火災層 [写真]	107
fig. 148	出土遺物実測図(1)	108
fig. 149	出土遺物実測図(2)	109
fig. 150	出土遺物実測図(3)	110
fig. 151	出土遺物実測図(4)	111
fig. 152	出土遺物実測図(5)	112
fig. 153	調査位置図 1 : 2,500	113
fig. 154	調査区配置図	113
fig. 155	調査区平面図	114
fig. 156	調査位置図 1 : 2,500	115
fig. 157	トレンチ配置図	115
fig. 158	調査区平面図	116
fig. 159	I期カマド [写真]	117
fig. 160	カマド平面図	117
fig. 161	1トレンチ全景 [写真]	120
fig. 162	調査位置図 1 : 2,500	121
fig. 163	第54-1次調査区 平面図・断面図	122
fig. 164	第54-2・55次第1・3遺構面平面図	123
fig. 165	第54-2・55次第3遺構面全景 [写真]	123
fig. 166	第54-2・55次第4・5遺構面平面図	124
fig. 167	第54-2・55次第4遺構面全景 [写真]	124
fig. 168	第54-2・55次調査区断面図	124
fig. 169	第54-3次第1遺構面全景 [写真]	125
fig. 170	第54-3次石垣 [写真]	125
fig. 171	第54-3次石垣下土留杭 [写真]	125
fig. 172	第54-3次調査区平面図	126
fig. 173	調査位置図 1 : 2,500	127
fig. 174	調査区平面図	128
fig. 175	調査区全景 [写真]	128
fig. 176	調査位置図 1 : 2,500	129
fig. 177	調査区平面図	130
fig. 178	調査位置図 1 : 2,500	131
fig. 179	18-1~3区平面図	132
fig. 180	18-3区全景 [写真]	132
fig. 181	18-4区全景 [写真]	133
fig. 182	S T01 [写真]	133

fig. 183	I8 - 4・5区平面図	133
fig. 184	I8 - 5区全景〔写真〕	134
fig. 185	調査位置図1:2,500	135
fig. 186	I区平面図・断面図	136
fig. 187	I区全景〔写真〕	136
fig. 188	II区平面図・断面図	137
fig. 189	S B01〔写真〕	137
fig. 190	S K02〔写真〕	137
fig. 191	S D02〔写真〕	137
fig. 192	II区全景〔写真〕	138
fig. 193	調査位置図1:2,500	139
fig. 194	調査区全景〔写真〕	140
fig. 195	調査区平面図・断面図	140
fig. 196	調査位置図1:2,500	141
fig. 197	第1遺構面平面図	142
fig. 198	調査区断面図	142
fig. 199	第2遺構面平面図	143
fig. 200	第2遺構面全景〔写真〕	144
fig. 201	調査位置図1:2,500	145
fig. 202	S B101〔写真〕	146
fig. 203	第1・2遺構面平面図	146
fig. 204	第2遺構面全景(西半)〔写真〕	148
fig. 205	第2遺構面全景(東半)〔写真〕	148
fig. 206	第3遺構面全景〔写真〕	149
fig. 207	第4遺構面全景〔写真〕	149
fig. 208	第3・4遺構面平面図・断面図	149
fig. 209	調査区断面図	150
fig. 210	調査位置図1:2,500	151
fig. 211	調査区平面図	152
fig. 212	調査区全景〔写真〕	152
fig. 213	調査位置図1:2,500	153
fig. 214	調査区平面図	154
fig. 215	調査位置図1:2,500	155
fig. 216	調査区平面図(西藏・甲藏・乙藏・大西藏)	156
fig. 217	乙藏底断面図	157
fig. 218	西藏石垣立面図	158
fig. 219	大西藏人蔵北側石垣〔写真〕	159
fig. 220	大西藏石垣立面図	160
fig. 221	調査区平面図(東蔵)	161
fig. 222	東蔵石垣立面図	162
fig. 223	東蔵内蔵東側石垣〔写真〕	163
fig. 224	東蔵東前蔵南側石垣〔写真〕	164
fig. 225	調査地全景〔写真〕	166
fig. 226	調査位置図1:2,500	167
fig. 227	調査区平面図	168
fig. 228	調査位置図1:2,500	169
fig. 229	調査区配置図	170
fig. 230	出土遺物実測図	170
fig. 231	調査位置図1:2,500	171
fig. 232	S D02上器1〔写真〕	172
fig. 233	S D02土器3〔写真〕	172
fig. 234	調査区平面図・断面図	172
fig. 235	S D02土器1～3出土状況平面図・立面図	173
fig. 236	調査区全景〔写真〕	174
fig. 237	調査位置図1:2,500	175
fig. 238	調査区全景〔写真〕	176
fig. 239	調査区平面図・断面図	176
fig. 240	調査位置図1:2,500	177
fig. 241	調査区平面図・断面図	178
fig. 242	第1遺構面全景〔写真〕	178
fig. 243	調査位置図1:2,500	179
fig. 244	調査区断面図	179
fig. 245	調査区平面図	180
fig. 246	調査位置図1:2,500	181
fig. 247	調査区平面図(南部)	182
fig. 248	調査位置図1:2,500	183
fig. 249	第1遺構面平面図	184
fig. 250	第3遺構面平面図	184
fig. 251	第1遺構面全景〔写真〕	184
fig. 252	第3遺構面全景〔写真〕	184
fig. 253	調査位置図1:2,500	185
fig. 254	調査区平面図	186
fig. 255	調査位置図1:5,000	187
fig. 256	3区平面図	188
fig. 257	3区全景〔写真〕	188
fig. 258	S P05平面図・断面図	188
fig. 259	S P05〔写真〕	188
fig. 260	3区-D拡張区断面図	189
fig. 261	S P01平面図・断面図	189
fig. 262	4区平面図	190
fig. 263	調査位置図1:5,000	191
fig. 264	1・2区全景〔写真〕	192
fig. 265	調査区平面図	192
fig. 266	調査位置図1:2,500	193
fig. 267	第5-1次調査区平面図	194
fig. 268	第5-2次調査区平面図	194
fig. 269	第5-1次調査区全景〔写真〕	195
fig. 270	第5-2次調査区全景〔写真〕	195
fig. 271	第5-2次調査S E01平面図・断面図	196
fig. 272	第5-2次調査S E02平面図・断面図	196
fig. 273	第5-2次調査S E02〔写真〕	197
fig. 274	第5-2次調査S E03〔写真〕	197
fig. 275	第5-3・5次調査区平面図	198
fig. 276	第5-4次調査区平面図	198

fig. 277 第5～3次調査 SX05 [写真] .....	198
fig. 278 第5～3次調査区全景 [写真] .....	199
fig. 279 第5～5次調査区全景 [写真] .....	199
fig. 280 第5～6次調査区全景 [写真] .....	199
fig. 281 第5～6次調査区平面図 .....	200
fig. 282 調査位置図1:2,500 .....	201
fig. 283 調査区平面図 .....	202
fig. 284 S A101 [写真] .....	203
fig. 285 S D102 [写真] .....	203
fig. 286 調査区南半部全景 [写真] .....	204
fig. 287 調査区北半部全景 [写真] .....	204
fig. 288 調査区断面図 .....	206
fig. 289 調査位置図1:2,500 .....	207
fig. 290 調査区断面図 .....	208
fig. 291 調査区全景 [写真] .....	208
fig. 292 調査区平面図 .....	208
fig. 293 調査位置図1:2,500 .....	209
fig. 294 調査区平面図・断面図 .....	210
fig. 295 出土遺物実測図 .....	211
fig. 296 S B01炭化物出土状況 [写真] .....	212
fig. 297 S B01遺物出土状況 [写真] .....	212
fig. 298 調査位置図1:2,500 .....	213
fig. 299 調査区平面図・断面図 .....	214
fig. 300 G r. 4 全景 [写真] .....	215
fig. 301 G r. 6 全景 [写真] .....	215
fig. 302 G r. 9 S D03平面図・断面図 .....	216
fig. 303 G r. 9 S D03 [写真] .....	216
fig. 304 調査位置図1:2,500 .....	217
fig. 305 調査区全景 [写真] .....	218
fig. 306 調査区平面図・断面図 .....	218
fig. 307 処理後復元作業 [写真] .....	219
fig. 308 保存処理後 [写真] .....	219
fig. 309 出土状況 [写真] .....	219
fig. 310 含浸処理準備 [写真] .....	219
fig. 311 欠損部樹脂補填 [写真] .....	219
fig. 312 処理後展示風景 [写真] .....	219
fig. 313 処理前 [写真] .....	220
fig. 314 鍔先取り外し後 [写真] .....	220
fig. 315 鉄網保存処理完了後 [写真] .....	220
fig. 316 鍔先保存処理完了後 [写真] .....	220
fig. 317 保存処理前状況 [写真] .....	221
fig. 318 X線透過画像 [写真] .....	221
fig. 319 クリーニング作業 [写真] .....	221
fig. 320 保存処理完了後 [写真] .....	221
fig. 321 山土状況 [写真] .....	221
fig. 322 姥生作業 [写真] .....	221
fig. 323 ウレタン梱包状況 [写真] .....	222
fig. 324 吊り上げ作業 [写真] .....	222
fig. 325 遺構検出状況 [写真] .....	222
fig. 326 パネル貼り付け作業 [写真] .....	222
fig. 327 設置作業 [写真] .....	222
fig. 328 設置完了状況 [写真] .....	222
fig. 329 現地実物 [写真] .....	223
fig. 330 シリコーン型取り [写真] .....	223
fig. 331 彩色作業 [写真] .....	223
fig. 332 展示設置状況 [写真] .....	223



fig. 7 企画展示『遺跡のお医者さん』



fig. 8 企画展示・講演会『落語に見る庶民のくらし』



fig. 9 出張講座 須磨パティオ 勾玉づくり



fig. 10 出張学校展示



fig. 11 「ホンモノとの出会い」『甲冑を着てみよう』



fig. 12 第22回 みどりと太陽のまつり

# I. 平成16年度 事業の概要

## 1. はじめに

阪神・淡路大震災の発生から10年目を迎え、震災復興区画整理事業も軌道に乗り、一部の事業地を除き街路や宅地基盤整備などが約8割程度完了しつつある。震災復旧・復興事業関連の埋蔵文化財保護の対応として、被災者である個人及び、中小企業者の復旧・復興事業については、引き続き補助事業として採択し発掘調査を実施している。

開発指導では、周知の埋蔵文化財包蔵地内の建築行為に対し、文化財保護法に基づく発掘届出書の提出及びその取扱いの指導を徹底している。これらの審査・指導について正確かつ迅速に処理するため、埋蔵文化財管理システムを運用しているが、これに加えて開発と埋蔵文化財保護の調整を目的としたホームページを開設しその周知の徹底を図っている。

調査事業では件数の減少傾向は今年度も同様であるが、調査と整理作業の積み重ねにより各遺跡の復元を進め、その成果を公開する事業（現地説明会・報告書作成）や、蓄積された発掘調査の資料を活かした活用事業が埋蔵文化財センターで行われている。埋蔵文化財保護行政の基礎となる遺跡地図の整備を進め、重要遺跡を選定し保存目的の確認調査を実施し、指定文化財にする事業など埋蔵文化財保護の基礎的な作業を今年度も進めている。また、文化財保護法の改正により条文の整理が行われたことに伴い、届出・通知の様式変更や、近代遺跡の保護と取り扱いの方向性を見定める契機となる調査を実施している。

## 2. 普及啓発

### 〔埋蔵文化財センター〕

**活動** 神戸市教育委員会が実施した市内の発掘調査で得られた各種の記録や出土遺物は、すべて埋蔵文化財センターに集積されている。また同時に出土遺物を整理・収蔵・保存・公開する拠点である。埋蔵文化財センターでは常設展示室・企画展示室・収蔵展示室を公開し、また特別収蔵庫の中や、遺物整理室の中をのぞけるようにしている。平成16年度の入館者は31,056人で、前年度比25.2%の増加であった。

**企画展示** 今年度は3回の企画展示を実施した。春の企画展示『昔むかしの井戸端会議』では、さまざまな時代のいろいろな井戸から見た古代の人々と水との関わりを、これまでの市内での発掘調査成果を基にして、展示をした。むかしの人々はどのようにして、井戸を作り、またどのようにして利用してきたのか、弥生時代から鎌倉時代までの井戸を時代ごとに紹介した。夏の企画展示『遺跡のお医者さん』では、文化財の保存と活用の重要性を、保存科学という分野を通して、わかりやすく説明した展示を行った。遺跡からの出土品には、放っておくとこわれてしまうものがたくさんある。遺構・遺物の保存には考古学だけでなく、科学的な知識や技術が必要であり、保存科学者はそれらを見守る医師のような存在である。

	展示内容	開催期間	入館者数
春	昔むかしの井戸端会議	4月10日～6月6日	15,602名
夏	遺跡のお医者さん	7月24日～9月5日	2,631名
秋	港町・兵庫津・賑わう庶民のくらし	10月30日～12月26日	3,283名
入館者合計			21,516名

	展 示 内 容	開 催 期 間	入 館 者 数
速報展示	秀吉と淡河～新発見！「らくいち」制札と淡河の文化財パネル展	9月18日～9月26日	625名
速報展示	兵庫城の堀跡発見！－兵庫津遺跡第35次調査成果速報パネル展－	12月1日～12月26日	1,091名
作 品 展	第3回・神戸市小学校社会科作品展『埋蔵文化財センター賞受賞作品展』	9月23日～10月3日	735名
作 品 展	いにしえを詠む一句会「斧」作品展－	1月29日～2月27日	1,173名

発掘調査で遺跡から出土する脆弱な遺物をどのようにして取り上げ、整理・保存していくのか、また、遺跡の一部をそのまま切り取ったり、剥ぎ取ったりして持ち帰ることによってその臨場感を保つことを展示した。関連イベントとして、期間中の8月4日・8月25日に「見せます！保存科学の舞台裏」を開催し、館内の保存処理施設を公開し、作業の一部を見学してもらった。2回合わせて59名の参加者があった。秋の企画展示『港町・兵庫津～賑わう庶民のくらし』では、港湾都市として賑わった町「兵庫津」に生きた人々の、暮らしの息吹を感じる考古資料を中心に、古代大輪田泊の痕跡から近世に至る港町・兵庫津を新たな視点で復元しようとする展示をした。期間中の11月7日には、落語家・桂小米朝氏講演会『落語に見る庶民のくらし』を開催し、200名の聴講を得た。また、11月21日・12月12日に展示解説を開催し、2回合わせて36名の参加者があった。企画展示の入館者数は、3回合わせて、21,516名である。

**速報展示** 『秀吉と淡河～新発見！「らくいち」制札と淡河の文化財パネル展示～』では、昨年度から始まった北区淡河町の地元と、神戸市、神戸大学文学部地域連携センターの三者による連携事業によって、発見された歳田神社（北区淡河町淡河）の制札を展示した。羽柴秀吉が天正7（1579）年と同8（1580）年に発給した2枚の制札（木札）と山緒書など、その関連文書を展示了。また、淡河地域にある社寺や仏像などの文化財の写真パネルも合わせて展示了。『兵庫城の堀跡発見！－兵庫津遺跡第35次調査成果速報パネル展－』では、発掘調査の成果をいち早く公表するため、速報展示を開催した。10月から11月にかけて、兵庫区切戸町から出土した陶磁器と、検出された遺構の写真パネルを展示了。速報展示の入館者数は、2回合わせて、1,716名である。

**作品展** 今年度から、神戸市小学校教育研究会社会科部と連携して、コミスタこうべ（神戸市生涯学習支援センター）で開催される『第3回・神戸市小学校社会科作品展』において、埋蔵文化財に関する作品について『埋蔵文化財センター賞』を選定した。受賞した34作品を、埋蔵文化財センターで展示了。また、新たな試みとして、『いにしえを詠む一句会「斧」作品展－』では、俳句の会「斧」との共催により、色紙や短冊に書かれた俳句の作品97点を、それぞれ対象となった遺物や遺跡の写真パネルと併せて展示了。2回合わせて、1,908名である。

**館外展示** 市内の身近な遺跡を紹介して地域の歴史について理解を深めてもらうことを目的とし、地域の施設を利用して展示会を開催した。今年度は北区道場町の農村環境改善センター、兵庫区の新湊川ふれあい会館（新湊川河川水防センター）、須磨区の須磨パティオで開催した。この他に神戸西部地区観光施設協議会主催で例年開催している埋蔵文化財センターの施設紹介の展示に今年度も加わった。

展示場所	展示内容	開催期間
花時計ギャラリー	春の企画展示の案内	4月15日～4月23日
花時計ギャラリー	「親子で体験考古学講座」の案内	7月2日～7月9日
花時計ギャラリー	ウエストコウベ パネル展	7月13日～7月22日
須磨バティオ・健康館3階	須磨の古代展－須磨区内の遺跡－	8月12日～8月30日
新湊川ふれあい会館	新湊川(旧堺藻川)流域の遺跡展	9月12日
しあわせの村	ウエストコウベ パネル展	10月17日～11月30日
農村環境改善センター	道場展	11月2日～11月3日

**出張学校展示** 社会教育との連携といった視点だけではなく、遺跡から出土した実物の資料を、子供たちが通う小学校で直接見ることによって、その小学校がある地域の歴史や文化を学び、また再認識することができるようとの目的で、平成10年度から希望のあった市内の小学校で展示会を開催している。展示では主に小学校の近くの遺跡から出土した遺物を並べ、期間中には学芸員による展示解説も実施している。今年度は6校、6回の展示を実施した。

小学校名	展示内容	開催期間	展示解説	受講人数
有瀬小学校	伊川谷周辺の古代の生活	5月17日～6月4日	6月4日	146名
伊川谷小学校	伊川谷周辺の古代の生活	6月4日～6月18日	6月9日	186名
福田小学校	古墳って何だろう？	6月18日～6月30日	6月23日	98名
なぎさ小学校	やよいじだいにタイムスリップ！	6月18日～6月30日	6月29日	66名
長田小学校	歴史の復習～古代の生活～	7月2日～7月16日	7月9日	57名
五位の池小学校	歴史の復習～古代の生活～	7月2日～7月16日	7月9日	76名
受講人合計				629名

**出張学校講座** 平成12年度から実施している講座で、小・中学校を対象に実際に自分の手でも作ることによって、当時の人々の暮らしの工夫や技術が体験できる内容としている。特に近年は主要教科以外の授業時間数が減少している関係から子供たちがものを作りだす体験が少なくなっている、子供たちのみならず教諭の方々にも大変好評で、希望校が年々増加傾向にある。今年度は35校(36回)で実施した。

**考古学講座** 「親子で体験考古学講座」は学校週休2日制が実施された平成6年度から実施している講座で、当初は体験を通じて昔の人々の暮らしの工夫や技術に学ぼうという趣旨で、第2土曜日の催し物であった。その後土曜日が完全に休日になった以降は、主に夏休みの期間中を中心に土曜日の催し物として続けられている。対象は小学校高学年から中学生で、小学生は保護者の参加も求めている。また高校生以上一般成人を対象としたもう少し内容を高度にした「体験考古学講座」も平成8年度以降実施されている。両者ともに好評である。また、今年度から文化体験プログラム支援事業として、「ホンモノ」との出会いをテーマに、生涯学習課と連携しながら体験講座を企画した。当初は、『古代へのタイムスリップ～学芸員の仕事体験』と題して、11月13日・11月27日に開催を予定して募集したが、応募がなかったため、内容を変更し、『出土遺物に見る戦国武将の姿』～甲冑を着てみよう～』

講 座 名	開催日	学 校 名	人 數	講 座 名	開催日	学 校 名	人 數
勾長づくり	4月30日	上高井小学校	66名	土器づくり	5月27日	狩場台小学校	67名
土器づくり	5月 6日	五位の池小学校	76名	土器づくり	5月28日	鷺の子台小学校	189名
土器づくり	5月 7日	花山小学校	89名	土器づくり	5月31日	谷上小学校	22名
勾長づくり	5月 7日	板石小学校	67名	勾長づくり	6月 2日	西落合小学校	66名
クッキーづくり	5月11日	浜山小学校	31名	勾長づくり	6月 3日	小郷小学校	108名
勾玉づくり	5月12日	根尾小学校	60名	勾玉づくり	6月 4日	鈴蘭台小学校	83名
勾玉づくり	5月13日	桂木小学校	128名	勾長づくり	6月 1日	椎谷小学校	25名
勾玉づくり	5月14日	多聞南小学校	36名	土器づくり	6月 8日	花谷小学校	146名
勾玉づくり	5月14日	なぎさ小学校	66名	勾玉づくり	6月10日	泉台小学校	108名
土器づくり	5月17日	朝越小学校	30名	勾玉づくり	6月10日	長田小学校	57名
貫頭衣づくり	5月18日	北須磨小学校	70名	勾玉づくり	6月11日	ひよどり台小学校	65名
貫頭衣づくり	5月19日	福住小学校	74名	土器づくり	6月16日	摩耶小学校	74名
勾玉づくり	5月20日	伊川谷小学校	186名	クッキーづくり	7月 1日	本庄小学校	127名
勾玉づくり	5月20日	箕谷小学校	107名	貫頭衣づくり	7月 2日	甲陽小学校	106名
勾玉づくり	5月21日	兵庫人間小学校	116名	貫頭衣づくり	7月 8日	本山第二小学校	178名
勾玉づくり	5月24日	太山寺小学校	16名	勾玉づくり	7月14日	宮本小学校	47名
貫頭衣づくり	5月25日	北山小学校	76名	勾玉づくり	9月30日	福住小学校	73名
土器づくり	5月26日	高羽小学校	137名	貫頭衣づくり	10月14日	多聞台小学校	60名
受講人数合計							3,042名

として、3月26日に開催した。戦国時代の武将が着ていたよろいを復元した衣装を身につけ、遺跡から出土した刀子（小刀）を観察しながら、金属でペーパーナイフを製作した。49名の参加があった。

**公民館講座** 夏休みの公民館事業である小・中学生を対象としたサマースクール中の1講座として、3公民館から依頼を受け、平成14年度から「古代人に挑戦」と題した体験考古学講座を実施している。今年度から、勾玉づくりの他に、石包丁づくりを実施した。石包丁づくりについて、埋蔵文化財センターで開催した。

**その他の講座** 上記の定期的な講座以外にも、依頼を受けて下記の各種講座を実施した。今年度は、埋蔵文化財センターに来館して実施したものはなく、現地に赴いて実施したものが4回ある。また、内容は体験考古学講座の形式のものと、通常の講義形式のものがある。

『親子で体験 考古学講座』			
講 座 名	開催日	内 容	参 加 者 数
樹木の探検と縄文時代のハッパを探そう	5月22日	遺跡から持って帰った土の中から、茎を探し出し、ラミネートフィルムに封入する。	47名
石包丁をつくろう	7月17日	粘板岩（高島石）で石包丁を作る。	56名
勾玉をつくろう	8月 7日	軟らかい印材で勾玉などのアクセサリーを作る。	187名
土器・埴輪をつくろう	8月21日	自然乾燥で硬化する粘土で土器や埴輪を作る。	96名
勾玉をつくろう	8月28日	軟らかい印材で勾玉などのアクセサリーを作る。	76名
どんぐりで縄文クッキーをつくろう	12月18日	ドングリとドングリの粉で当時のクッキー状の食べ物を焼く。	11名
参 加 者 数 合 计			473名

親子で『赤米作りに挑戦しよう』				
講 座 名	開催日	内 容	参加者数	
貴頭衣をつくって田植えに挑戦!	6月19日	西日本自然教育園の水田で古代米を実際に田植えし、秋の収穫までを体験する。	68名	
田んぼの草取りと石畳丁づくり	7月24日	貴頭衣を作つて着たり、石畳丁を作つて	102名	
自分でつくった石畳丁で収穫に挑戦!	10月16日	収穫したりする。	67名	
			参加者数合計	237名

『体验 考古学講座』				
講 座 名	開催日	内 容	参加者数	
土器・埴輪・土笛をつくろう	2月12日	焼物用の粘土で土器や埴輪、土笛を成形する。	8名	
	2月26日	乾燥させた土器等を実際に野焼きで焼成する。	7名	
古代のアクセサリー 勾玉・管玉をつくる	3月12日	少し硬い印材で勾玉や管玉などのアクセサリーをつくる。	15名	
			参加者数合計	30名

公 民 館 名	開催日	講 座 名	受講人数	
玉津南公民館	7月21日	サマースクール古代人に挑戦!～勾玉づくり～	25名	
東垂水公民館	7月28日	サマースクール古代人に挑戦!～勾玉づくり～	21名	
百合公民館	7月29日	サマースクール古代人に挑戦!～勾玉づくり～	24名	
東垂水・玉津南	8月31日	サマースクール古代人に挑戦!～石畳丁づくり～	33名	
			受講人数合計	70名

各種山張講座	講 座 名	開催日	開 催 場 所	受講人数
石畳丁づくり(リトルファーマースタイ)		7月31日	神出自然教育園	40名
土器づくり		1月8日	須磨パティオ	29名
遺跡から学ぶ神戸の歴史		3月4日	東垂水公民館	21名
勾玉づくり		3月19日	須磨パティオ	150名
			受講人数合計	240名

その他の催し 今年度は、みどりと太陽のまつりが、従来の西神中央駅東側のブレンティ広場だけではなく、西神中央公園内においても開催されたため、参加者数が昨年度よりも大幅に増加した。埋蔵文化財センターの玄関前において、土器パズル・輪投げ・火起こし体験・古代米配布を実施した。

進 し 物 名	開催日	埋藏文化財センターのブースの参加者数
第22回 みどりと太陽のまつり	5月15日	3,292名

#### (文化財保護強調週間の催し)

垂水区の大歳山遺跡公園で11月6日(上)に『おおとしやま祭り2004』を垂水区と連携して開催した。地域に残っている埋蔵文化財を日常生活の中に活かすことを、その地域の人々と一緒にになって考える試みであり、毎年少しづつ内容を変えながら開催している。今年度は復元された竪穴住居の内部を公開と、古代人の生活体験として土器づくり・勾玉づくり・火起こし体験・古代米(赤米・黒米)の試食を行った。また塗焼きの実演を行い、木製の臼と堅杵を使った脱穀・古代衣装の試着も行った。会場内の別のブースでは地元のボランティアの方々によるリース作り・松ぼっくり細工・竹とんぼ細工も行われた。参加者数は450人であった。

### [発掘調査現地説明会の開催と報道関係資料提供]

発掘調査において重要な発見があった場合、市役所内の市政記者クラブで発表を行っている。また、現地発掘調査期間中の現地説明会の開催や、要望があれば地域住民を対象とした遺跡の公開・説明会を実施している。

記者発表・資料提供				
名 称	発 表 日	内 容	備 考	
灘区 西求女塚古墳	平成16年11月19日	新指定の国史跡	平成17年3月2日 官報告示	
兵庫区 兵庫城跡	平成16年11月26日	兵庫城闇連遺構（細跡）の発見	速報展示開催（12/1～12/26 埋蔵文化財センター・市立博物館）	
兵庫津遺跡第35次調査				
神戸市埋蔵文化財ホームページ	平成16年11月30日	遺跡地図の配信を開始	http://www.mibun-kobe.net/	
ページ開設				
垂水区 舞子砦台跡 第4次調査	平成17年2月14日	積石式砦台の全容判明	現地説明会開催（平成17年2月16日～2月18日） 見学者 205名	
灘区 西求女塚古墳	平成17年3月18日	新指定の重要文化財		
遺跡の公開				
遺 跡 名	開 催 日	内 容		見 学 者 数
須磨区 行幸町遺跡	平成16年6月6日	奈良時代の石立柱遺物の検出		見学者約140名
須磨区 行幸町遺跡	平成16年7月10日	鎌倉時代・室町時代の井戸跡の発見		見学者約 70名
兵庫区 兵庫松本遺跡	平成16年7月11日	弥生時代末～古墳時代初頭の磐穴住居跡の発見		見学者約120名
灘区 西畠古酒蔵群	平成16年9月21日	近世から近代に至る酒蔵の遺構とその変遷		見学者約 20名
西区 占田南遺跡	平成17年3月12日	弥生時代後期～古墳時代後期の住居跡		見学者約 50名

### [資料の貸出]

平成14年4月に制定した『所蔵資料の貸出し基準』に基づいた資料の貸出しは、12件、191点（上器・瓦等 81点、土製品 25点、石製品・石器 3点、金属器 51点、遺構切り取り資料 13点、自然遺物 4点、木製品 2点、ガラス製品 10点、生痕化石 2点）があった。写真資料の貸出しは、44件、243点。特別利用は26件であった。

### [刊行物]

平成16年度の刊行物は、以下の7点である。

平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報	平成17年3月発行 領価1,500円
兵庫松本遺跡 第2～4・12・17・19次発掘調査報告書	平成17年3月発行 領価2,000円
森南遺跡 第1・2次調査発掘調査報告書	平成17年3月発行 領価1,800円
水谷遺跡第10次 馬掛原遺跡第1次調査発掘調査報告書	平成17年3月発行 領価 700円
戎町・松野遺跡発掘調査報告書	平成17年3月発行 領価1,900円
森北町遺跡 第20次調査 発掘調査報告書	平成17年3月発行 領価 400円
神戸市埋蔵文化財分布図	平成17年3月発行 領価 500円

### 4. 開発指導

周知の埋蔵文化財保有地内における上木工事等について、開発面積の大小に関わらず文化財保護法に基づく届出・通知（文化財保護法第57条の2・同法第57条の3）が必要であり、必要とされる保護措置を指示している。平成11年度からは建築確認申請に伴う事前届出制度（『神戸市民の住環境をまもりそだてる条例』）における事前届出書の閲覧により、埋蔵文化財発掘届書の提出及び土木工事についての取り扱いの指導を徹底してきた。平成16年度の文化財保護法に基づく届出・通知についての件数は別表のとおりである。

本年度の届出・通知件数は、738件であり、前年度より82件上回った。その内、民間事業者や個人が提出する文化財保護法第57条の2による届出は696件（前年度597件）、事業者が公的機関の同法第57条の3に基づく通知は、42件（前年度59件）であった。法57条の2で増加が見られたのは、個人住宅について28件の減少があったが、一方で共同住宅、住宅兼用建物、その他建物などの築造とそれに伴うガスや水道敷設にかかる届出が前年度より、77件の増加となつたためである。届出・通知に関する指示の内容は、事前の発掘調査が53件、工事施工時に確認する工事立会が83件、工事による埋蔵文化財に影響がなく慎重に工事実施を指示した件数が596件、その他6件であった。また、神戸市開発指導要綱に基づく各種開発行為事前審査は、前年度と比べ24件の減少となっている。

これらの埋蔵文化財発掘届出・通知及び各種開発行為事前審査の取扱いは、周辺調査データに基づく書類審査と現地調査の試掘調査によって決定している。その試掘調査は、245件で前年度より32件減少となっている。

**ホームページ** また、昨年度よりシステム開発していた開発と埋蔵文化財の保護との調整を目的とするホームページ「神戸市の埋蔵文化財」を12月1日から配信を開始した。内容は、市内における遺跡の分布状況（遺跡分布図）、遺跡の検索機能、開発事業計画策定に伴う埋蔵文化財保護法に基づく届出等の手続きの流れ、文化財保護法中の埋蔵文化財保護に関する条文の抜粋などである。開発事業計画策定にあたって事業者が、市内の遺跡分布状況を事前に確認し、文化財保護について必要な措置を認識することのできるホームページである。毎年更新される周知の埋蔵文化財図録を反映し、届出や試掘調査依頼書の書式もダウンロードできる。

## 5. 調査事業

平成16年度に実施した発掘調査事業は68件で、それに要した経費（出土整理・保存処理を含む）の総額は、566,790千円であった。その内訳は、発掘調査事業費の約9割を占める開発事業に伴う本発掘調査に要した費用は、516,160千円（68件）、遺跡整備に伴う事前調査（整理）に位置づけられている五色塚古墳出土品整理は、5,014千円、遺跡の保存目的の範囲内容確認調査は4件で、22,517千円、試掘・確認調査が245件、23,099千円であった。

**国庫補助事業** 上記の調査事業のうち、文化財保護法の定めと国の補助事業採択基準により補助事業として採択を受けたものについて、調査事業と保存処理事業を行っている。埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業は、事業費116,112千円であった。その内訳は、個人住宅等各種開発事業に伴う事前調査である試掘・確認調査が23,099千円、農業基盤整備事業（圃場整備事業）に伴う試掘・確認調査1,533千円、遺跡の保存目的の範囲確認調査（舞子砲台跡・端谷城跡・淡河城跡・大輪田泊・福原京闕連）22,700千円、農業基盤整備事業（圃場整備事業）に伴う発掘調査が1件・1,014千円、個人住宅や共同住宅等に伴う発掘調査が24件・49,797千円（その内、個人・零細事業者3件・3,366千円）、報告書作成のための整理は3件・14,551千円、遺跡地図作成等は3,249千円、その他の経費は166千円であった。

文化財保存事業費では、兵庫沖遺跡第15次調査出土金銅製品の保存処理事業として115点（銅製品71点・鉄製品44点）の保存処理を行い、その事業費は1,011千円であった。

**市内発掘調査** 調査件数は昨年度に続き減少傾向にある一方で、これまでの調査により蓄積された資料をもとに各遺跡の復元を行ったり、遺跡の評価を高め指定文化財としたり、今後保護すべき新たな対象を見出している。また、この成果が広く市民に公開する活用事業にも活かされている。

<b>新発見の遺跡</b>	昨年度の試掘調査により発見された大橋町遺跡の発掘調査が行われ、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物と層敷墓と考えられる十坑墓が検出され、集落の様相の一端が明らかとなった。
<b>復興関連の調査</b>	復興区画整理事業地内では、森南町遺跡（1件）・兵庫松本遺跡（6件）・御蔵遺跡（2件）・松本遺跡（6件）・戎町遺跡（5件）で区画整理事業の街路建設や個人住宅、共同住宅建設に伴う事前調査が実施された。いずれも調査次数を重ねることにより、歴史的環境の復元がより詳細にできるようになってきている。その中の一つをあげると、兵庫松本遺跡では今回の発掘調査で23次の調査を重ねることになった。震災以降に発見された当遺跡は、縄文時代晚期から鎌倉時代に至る集落の様相を明らかにし、出土品の整理も進み集落変遷を詳細に復元できる資料の蓄積があった。その成果を第20次調査期間中に現地説明会を開催し公開している。
<b>酒蔵の調査</b>	灘五郷の多くの酒蔵は阪神・淡路大震災で大きな被害を蒙り、当地の酒造業の環境も大きく変化し、平成8年度に初めての調査が行われ、平成10年に周知の埋蔵文化財に登録された。本年度も1件の調査を実施し、近世から近代に至る酒造構造の変遷の一端が明らかにされた。
<b>近代遺跡の調査</b>	中央区臨浜町で行われている区画整理事業地内で明治時代末期頃に建設された神戸臨港鉄道の煉瓦造橋台が4基発見された。同鉄道は、同時期に開始される近代神戸港建設への先行事業において建設されたもので、神戸の近代化、国際港湾都市発展の歴史を物語る上で少くとも重要な遺産と位置づけ、調査を開始するとともに、その重要性から現地保存への理解を事業者に求めた協議を開始した。4基の橋台のうち、当初の形状を最もよく残している南本町第4橋台に現地保存を行う方針で協議を進めている。また、小野浜町で計画されている都市計画道路の敷地内で、同鉄道関連の遺構として煉瓦下水道跡が発見された。保存の協議をした結果調査後、新たに造成される生田公園に敷地内に切り取り移設し、モニュメントとすることになった。文化財保護法改正における考え方から、本市においても近代遺跡として神戸港建設関連遺跡について今後、保護の対象とすることとした。
<b>保存目的調査</b>	保存目的の調査としては、舞子砲台跡・端谷城跡・淡河城跡・兵庫津遺跡（大輪田泊関連）の4遺跡で実施した。いずれも当市において重要な遺跡であり、将来的に指定をめざすものであり、その保護・保存に関わる資料を得る為に複数年の計画で確認調査を実施している。
<b>史跡指定</b>	灘区都通3丁目61番所在の西求女塚古墳が、平成17年3月2日付で国指定史跡の指定を受けた。同古墳は、昭和60年度より13次にわたり範囲確認調査を実施した結果、全長98mの古墳時代前期初頭の大型前方後方墳であり、後方部の堅穴式石室は、慶長伏見大地震により崩れていたが、舶載一角縁神獸鏡を含む12面の鏡や、多量の武器、工具などの鉄製品、紡錘車形石製品などの豊富な副葬品があった。出土品の整理及び保存処理作業を計画的に実施し、その調査成果をまとめた発掘調査報告書を平成16年3月に刊行した。この成果をもとに平成16年7月16日付で国史跡指定申請を行った。畿内地域における出現期古墳の代表であり、当該時期の古墳の構造・副葬品組成、葬送儀礼及びその時代の社会を知る上で重要な古墳であると評価を得て国史跡の指定を受けた。
<b>重要文化財の指定</b>	また、出土資料についてもその重要性は高く評価されており、鏡鏡12面・鉄製品230点・碧玉鉢車型石製品1点と附として織物残欠2点・土師器残欠179点・堅穴式石室石材54点について、国の重要文化財指定のための調査（文化庁文化財部の調査：平成17年1月）を受

け、古墳時代初頭の畿内の首長墓およびその場での葬送儀礼の実態を考える上できわめて貴重な一括資料であると評価を受けた。平成17年3月18日付けで国の文化審議会より、重要文化財新指定の答申を受ける運びとなった。(指定は平成17年度)

#### 詳細調査

**埋蔵文化財保護の基礎となる周知の埋蔵文化財の指定及び遺跡地図作成のため、踏査による分布調査を実施している。今回は、北区山田町坂本に所在する丹生山明要寺跡(調査期間:平成17年2月23日~3月11日)と、中央区神戸港地方一口里地先所在の滝山城跡(調査期間:平成17年3月14日~3月15日)について実施した。**

**丹生山明要寺** 明要寺跡は急峻な地形を有する丹生山山頂(標高514.8m)に存在する。明要寺について伝える文献は少ないが、文龜年間(1501~1504年)に製作されたと考えられる「紙本着色丹生山明要寺參詣曼茶羅図」(丹生神社所蔵)ある。これによると明要寺は本堂を中心に仁王門・阿弥陀堂・經藏・十王堂・三重塔・大口堂・不動堂や、急峻な参道と石段、その両側に連なる寺坊からなる大規模な山岳寺院であったことがうかがえる。明治時代の廃仏毀釈により荒廃し、現在山頂には丹生神社が残るのみである。考古学的な調査は1979年に元興寺文化財研究所により試掘調査が実施されたほかではなく、実態は明らかではない。分布調査では、尾根上で平坦面を確認している。また、丹生神社から東方に派生する尾根筋と南東方に派生する尾根との間の谷筋では、山頂に至る参道の斜面に沿って交互に平坦面が並び、頂部付近では石段も確認された。石段の両側にも平坦面が確認され、平坦面の背後の斜面に石垣の存在も確認された。周辺からは須恵器片も採取された。分布調査の結果、明要寺跡の遺構が良好に存在する可能性があり、その成果を遺跡地図に反映した。

#### 滝山城跡

滝山城跡は、神戸市街地を見下ろす六甲山系の城山(323m)に位置する中世の山城である。

平成元年度にロープウェイの建設計画に伴う試掘調査が行われ、16世紀代の遺構が確認されたが、これ以降調査は実施されておらず詳細は不明である。今回の分布調査は、兵庫県教育委員会が実施した県内に存在する中世城館・砦跡等と主要な莊園を対象にした悉皆調査(昭和54年~56年)の調査結果を踏まえ、改めて遺構の配置確認と若干の補足、修正を行った。調査では新たに平坦面を1ヶ所発見することができた。今後は、確認調査を実施して、遺構の詳細を把握し、これらの遺跡の保護を図っていく予定である。



fig.13 煉瓦下水道跡切り取り



fig.14 古代大輪田泊の石棟モニュメント

**街づくりとの連携** 埋蔵文化財調査や市内に点在する史跡を活用し、まちづくりに活かす取り組みを行っている。今年度は、兵庫区との連携と協働事業で「古代人輪田泊の石標のモニュメント」を兵庫区船大工町に築造した。兵庫区では、歴史を生かした協働のまちづくりをめざしており、区内各所に点在している史跡など地域の歴史的な遺産をネットワークさせながら、歴史と自然の散策路計画の具体化をめざしている（兵庫区歴史花回道）。昨年度は柳原惣門の復元を試みる際に平成14年度の確認調査の成果が活かされた。今回のモニュメント築造もこの事業に関連している。

モニュメントとなった花崗岩の石材は、昭和27年の新川運河浚渫工事の際に出土したもので発見当時古代大輪田泊の防波堤（波消し）の石材の一部と考えられていた。この石材が発見された場所から北西約250mの地点で昨年度確認調査が行われ、古代の港湾施設の一部と考えられる施設の構造が発見され、注目されるようになった。この石材は灘区摩耶埠頭公園内に記念碑として使用されていたものを出土地近くに里帰りさせ、当地が大輪田泊であることをイメージできるようなモニュメントとした。モニュメントは、兵庫区船大工町に所在する道路用地で、石柱（石材）のモニュメントと説明看板1基を設置した。

#### 文化財保護法に基づく届出・通知、試掘依頼等

#### 発掘調査、整理作業件数一覧

No	内 容	件 数
1	発見、発掘届・通知	738件
i	調査のための発掘届（57条第1項）	0件
	民間事業に伴う発掘届（57-2）	696件
	通常事業関連	684件
	復興事業関連	12件
ii	公共事業に伴う発掘通知（57-3）	42件
	通常事業関連	39件
	復興事業関連	3件
iii	発見届・発見通知（57-5・6）	0件
2	発掘調査の報告（保謹法58条2）	35件
3	開発行為事前審査等各種申請	139件
4	試掘調査（依頼件数）	245件
i	通常事業関連	236件
	通常公共関連	14件
	通常民間関連	222件
ii	復興事業関連	9件
	復興公共関連	2件
	復興民間関連	7件
5	工事立会	61件

No	内 容	件 数
1	発掘調査（大規模確認調査も含む）	67件
i	公共事業に伴う発掘調査	21件
	通常事業関連	9件
	復興事業関連	12件
ii	民間事業に伴う発掘調査	44件
	通常事業関連	16件
	復興事業関連	28件
iii	開場整備事業に伴う発掘調査	2件
2	整理作業（復興調査整理作業を含む）	5件

#### 発掘調査面積（単位：m<sup>2</sup>）

	公共事業関連	民間事業関連	計	延べ調査面積
通常事業	2,890	6,072	8,962	9,669
復興事業補助事業	0	2,897	2,897	5,320
復興事業受託事業	8,850	0	8,850	13,368
計	11,740	8,969	20,709	28,357

#### 発掘調査面積別件数

調査面積	件 数	調査面積	件 数
～ 100m <sup>2</sup>	33	1,001 ～ 2,000m <sup>2</sup>	6
101 ～ 300m <sup>2</sup>	16	2,001 ～ 5,000m <sup>2</sup>	0
301 ～ 500m <sup>2</sup>	4	5,001m <sup>2</sup> 以上	0
501 ～ 1,000m <sup>2</sup>	9	合 計	68

平成16年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）1

No.	施設名	所在地	所有者	調査担当者	調査面積 延床面積	調査期間	調査内容	調査目的
1	若北町光跡 第1次調査	東灘区若北5-15	神戸市教育委員会	岡野 光	50m <sup>2</sup> 130m <sup>2</sup>	16.10.26～ 16.11.13	弥生時代末の柱穴跡？・柱穴・溝、中世の柱立柱跡等、柱穴・溝、土坑などを確認。	個人住宅 (既存施設事実)
2	深北町道沿 第2次調査	東灘区深北4丁目3-2	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	40m <sup>2</sup> 40m <sup>2</sup>	17.02.29～ 17.03.05	遺構面は2面。弥生時代の乱形式石垣が1面。個人住宅 跡生跡(後壁の柱穴跡・小消費を確認)。	個人住宅 (既存施設事実)
3	森南町道沿 第3次調査	東灘区森南町2丁目	神戸市教育委員会	岡野 登	75m <sup>2</sup> 135m <sup>2</sup>	16.07.13～ 16.12.08	縄文～弥生時代。近世時代初期・中期時代後期・ 後期時代の溝・土坑・落ち込み・ビット・路跡など、室町時代の井戸・堀などを探査。	区画整理
4	木山北道跡 第3次調査	東灘区木山本1丁目134番 13	神戸市教育委員会	岡野 登	15m <sup>2</sup> 15m <sup>2</sup>	17.03.24～ 17.03.27	墳塚部分を対象として調査実施。古墳時代前段 の第六段墳(溝・溝・土坑などを確認)。	共同住宅 (既存施設事実)
5	福楽賞坂古墳 第2次調査	東灘区同本1丁目111-14	神戸市教育委員会	岡野 登	20m <sup>2</sup> 20m <sup>2</sup>	17.03.15～ 17.03.29	溝・土坑・ビットなどを確認。溝内から古墳時 代初期の土器多量出土。屋根瓦等古墳の前方 部確認。	個人住宅 (既存施設事実)
6	佐古箕町遺跡	東灘区佐古箕町3丁目107 -4	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	20m <sup>2</sup> 20m <sup>2</sup>	17.01.27～ 17.02.07	古墳時代後期の方形整穴墓1棟、埴立柱跡物 2棟などを確認。	個人住宅 (既存施設事実)
7	御家堂跡 第76次調査	東灘区御家町御家町芦本	神戸市教育委員会	浅谷誠吾 中尾さやか	20m <sup>2</sup> 20m <sup>2</sup>	16.04.05～ 16.04.08	墳塚墻下予定部分について調査実施。急峻な斜 面のため、自然剥落による落ち込みが想 定されたのみ。	区画整理
8	御家堂跡 第77次調査	東灘区御家町御家町城ノ 前144番の一部	神戸市教育委員会	阿部敬弘	40m <sup>2</sup> 40m <sup>2</sup>	17.02.07～ 17.02.18	丁度墳塚底まで調査実施。古墳時代後期のビッ ト・溝・落石の半面ブランの露出。	個人住宅 (既存施設事実)
9	日暮泉跡 第22次調査	中央区日暮井町3丁目320	神戸市教育委員会	中尾さやか	60m <sup>2</sup> 60m <sup>2</sup>	16.09.02～ 16.09.09	秦晉時代の東西方向の溝1条、柱穴約50箇	宅地・丁寧付住宅 (既存施設事実)
10	神戸臨海緑洲南北 町1号港着陸跡	中央区臨海緑洲南北 町1号港着陸跡	神戸市教育委員会	岡野 登 猪俣達也 山本雅和	715m <sup>2</sup> 715m <sup>2</sup>	16.05.11～ 16.07.02	第1・第2・第3・第4段階の沿岸道路の複数 段確認。花崗岩の塊を記する造瓦瓦礫台と 基礎。第3橋柱は、被災復旧保存、第4は現況 設備保存。	区画整理
11	神戸臨海緑洲南北 町1号港着陸跡	中央区臨海緑洲南北 町1号港着陸跡	神戸市教育委員会	岡野 登	270m <sup>2</sup> 540m <sup>2</sup>	17.01.21～ 17.02.21	第1・第2橋台の洞査。花崗岩の隅石を記する 造瓦瓦礫台、第1・第2橋台に既設保土、一部 セメントメントとして切り取り保土活用。	区画整理
12	神戸臨海緑洲南北 町1号港着陸跡	中央区小野浜町 真町下水道跡	神戸市教育委員会	横川浩子	45m <sup>2</sup> 45m <sup>2</sup>	16.06.30～ 16.07.12	花崗岩の隅石を記する保土の下水道跡。明 治60年以前の築てと利用。一部移設保存。	道路
13	猪内遺跡 第6次調査	中央区猪内鶴5丁目209 番	神戸市教育委員会	中尾さやか	150m <sup>2</sup> 150m <sup>2</sup>	16.11.03～ 16.11.17	弥生時代後期のビット・進行する秦晉時代の溝 2条などを確認。	共同住宅 (既存施設事実)
14	精・火門町遺跡 第25次調査	中央区精町6丁目3-22	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	200m <sup>2</sup> 400m <sup>2</sup>	16.01.21～ 16.03.31	第1・遺構(平安時代末)竪柱竪立柱構築・雨 漏など、第2遺構(平安時代中期後半)・ 柱穴在用・方形周溝等・土坑・落ち込みなどを 確認。	共同住宅 (既存施設事実)
15	精・火門町遺跡 第33次調査	兵庫区精町1丁目2-17	神戸市教育委員会	山口美英	65m <sup>2</sup> 55m <sup>2</sup>	16.09.03～ 16.09.06	時期不明の柱穴・ビット・土坑を確認。	個人住宅 (既存施設事実)
16	祇園遺跡 第11次調査	兵庫区上三条町1丁目20	神戸市教育委員会	須藤 宏	40m <sup>2</sup> 80m <sup>2</sup>	16.09.14～ 16.10.01	弥生時代末と平安時代の遺構面を確認。土坑・ 柱穴などを確認。	商業ビル (既存施設事実)
17	祇園遺跡 第15次調査	兵庫区上長押町3-5	神戸市教育委員会	須藤 宏	60m <sup>2</sup> 95m <sup>2</sup>	16.11.24～ 16.12.10	弥生時代末の円形整穴土器・土坑・溝など、平 安時代末遺構の柱穴・土坑・溝などを確認。	前庭・二階付宅 (既存施設事実)
18	元鹿経本遺跡 第16次調査	兵庫区松本通2丁目1-2 (松本地2-1前区1号弓)	神戸市教育委員会	中尾さやか	30m <sup>2</sup> 60m <sup>2</sup>	16.04.08～ 16.04.15	弥生時代後期の瓦葺・夯实時代～古墳時代前 期のビット・落ち込みなどを確認。	個人住宅 (既存施設事実)

平成16年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）2

No.	遺跡名	所在地	所有者	調査担当者	測量面積 延べ面積	調査期間	調査内容	調査原因
19	兵庫松本遺跡 第19次調査	兵庫区松本通2丁目	神戸市内務局会	安田 道・ 山口英美	220㎡ 310㎡	16.04.07～ 16.09.09	1区・2区の調査。壁穴住居2棟、土坑、落ち込み、汚などと多段の構造を確認。	区间整理
20	兵庫松本遺跡 第20次調査	兵庫区松本通2丁目1-3、3-1、3-2、3-3、4-1～4-9、(3-7、1-6、3-2、3-3、3-5) (兵庫区御殿通5丁目1号) (兵庫区御殿通5丁目2号)	神戸市教育委員会	山口英正	190㎡ 280㎡	16.08.15～ 16.09.09	途中・古代前期の洗浄、弥生時代末～古墳時代初期の壁穴住居8棟、平安時代後期～鎌倉時代初期の水槽痕跡を確認。	共同住宅 (国際補助事業)
21	兵庫松本遺跡 第21次調査	兵庫区松本通2丁目1-3、3-1、3-2、3-3、3-5 (兵庫区御殿通5丁目2号) (兵庫区御殿通5丁目3号)	神戸市教育委員会	山口英正・ 中尾さちか	90㎡ 180㎡	16.07.25～ 16.08.30	途中・古代後期～古墳時代初期の壁穴住居8棟 (うち8号17ヶ所)、火葬遺物上から鉄鏃、菅原刀形軋足の成立社種類などを確認。	区间命名 (国際補助事業)
22	兵庫松本遺跡 第22次調査	兵庫区松本通2丁目1-3、3-1、3-2、3-3、3-5 (兵庫区御殿通5丁目2号) (兵庫区御殿通5丁目3号) (アマ)	神戸市教育委員会	中尾さやか	16㎡ 32㎡	16.08.18～ 16.08.28	第19次調査より見びる懸空式居 (SD11) の、個人住宅用陶器・柱穴などを確認。	第19次 個人住宅 (国際補助事業)
23	兵庫松本遺跡 第23次調査	兵庫区松本通2丁目10-13	神戸市教育委員会	河野敬生	26㎡ 52㎡	17.02.21～ 17.03.22	基礎杭部分のみ調査実施。弥生時代末～古墳時代初期の壁穴住居11ヶ所・溝・ビット・落ち込みなどを確認。さらには下層では弥生時代後期の埴輪瓦が確認。	個人住宅 (国際補助事業)
24	兵庫松本遺跡 第24次調査	兵庫区松本通2丁目10-13	神戸市教育委員会	藤井太郎	320㎡ 640㎡	16.04.12～ 16.05.05	小松木の寺町創建前、江戸中期の草創の改築、昭和時代末～古墳時代初期の壁穴住居を確認。また、個人用の便所用の埴輪瓦も確認。わずかに引出物を確認。	寺町裏地改築 (国際補助事業)
25	兵庫松本遺跡 第25次調査	兵庫区本町1丁目	神戸市教育委員会	須藤 宏	50㎡ 81㎡	16.07.12～ 16.09.13	室町時代から江戸時代までの5箇の造縫柱を確認。町割り少なくとも室町時代まで残ることを確認。	遠野型古 (国際補助事業)
26	石冢寺跡 第1次調査	北区淡河町神影字若木93番	神戸市教育委員会	須藤 宏	55㎡ 80㎡	16.04.16～ 16.04.28	自然的造縫柱に加え溝。室町時代初の礎石をもたらす入り込みと寺坂坊の造成、埴輪を確認。	自然石造縫柱 (国際補助事業)
27	野瀬遺跡 第5次調査	北区淡河町野瀬	神戸市教育委員会	須藤 宏	300㎡ 300㎡	17.01.11～ 17.01.24	壁突合を確認。	異高脚 (国際補助事業)
28	淡河城跡 第5次調査	北区淡河町淡河字上二山	神戸市教育委員会	小谷 三	150㎡ 150㎡	17.03.19～ 17.03.30	本丸内のトレンチによる範囲的調査。水溜1ヶ所・溝・ビット・土坑などを確認。	跡地生産 (国際補助事業)
29	小塩北・谷遺跡	北区淡河町西町6-8-6	神戸市教育委員会	前原佳久	200㎡ 200㎡	16.11.30～ 16.12.08	防火水槽・ポンプ室部分と雨落し渠部分の調査。跡地範囲ごとの整備による壁縫合部を特徴。	内田家庄跡存査 区间特別の少作
30	御殿遺跡 第34次調査	兵庫区御殿通5丁目、6丁目	神戸市教育委員会	須藤 宏	110㎡ 276㎡	16.07.27～ 17.03.25	54.1～54.3調査、54.1では室町時代初期の壁穴住居・溝・土坑・溝を確認。54.2では古墳時代後期の土坑を確認。	区间整理
31	御殿遺跡 第35次調査	兵庫区御殿通6丁目9	神戸市教育委員会	須藤 宏	40㎡ 165㎡	17.02.07～ 17.02.28	4世・金鏡～平安の造縫柱と古墳時代後期の土坑を確認。さらには、下層に2重の水口土壠跡。	戻戸 (国際補助事業)
32	佐野遺跡 第39次調査★	長田区心野通4丁目	神戸市教育委員会	中尾さやか	320㎡ 320㎡	16.07.07～ 16.07.20	古墳時代後期の溝・落ち込み・ビットなどを確認。	区间整理
33	人丸町遺跡 第1次調査	長田区人丸町5丁目	神戸市体育協会	中谷 止	2,600㎡ 2,600㎡	16.03.12～ 16.11.05	平安時代～律令時代始めの井戸・区画壁を作り、また竹筒式で構成される尖塔形を確認。古墳時代後期の人丸。	区间整理
34	二葉町遺跡 第15次調査★	長田区久保町5丁目、二葉町寺町6丁目	神戸市体育協会	黒田泰止	1,206㎡ 1,206㎡	16.04.09～ 17.02.10	39.1～48.5調査。39.4では12世紀代の懸空式居物・井戸・木棺墓・溝などを確認。	区间整理
35	戎町遺跡 第36次調査★	須磨区戎町2丁目	神戸市教育委員会	中尾さやか	76㎡ 76㎡	16.06.14～ 16.06.28	弥生時代中期の壁穴住居・方型圓周窓の開構を確認。	区间整理
36	戎町遺跡 第37次調査★	須磨区戎町1丁目3-3	神戸市教育委員会	中尾さやか	76㎡ 76㎡	16.03.06～ 16.03.12	弥生時代中期の方型圓周窓の開構の一部。東西方向の溝を確認。	須磨・立場付付木 (国際扶助事業)

## 平成16年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）3

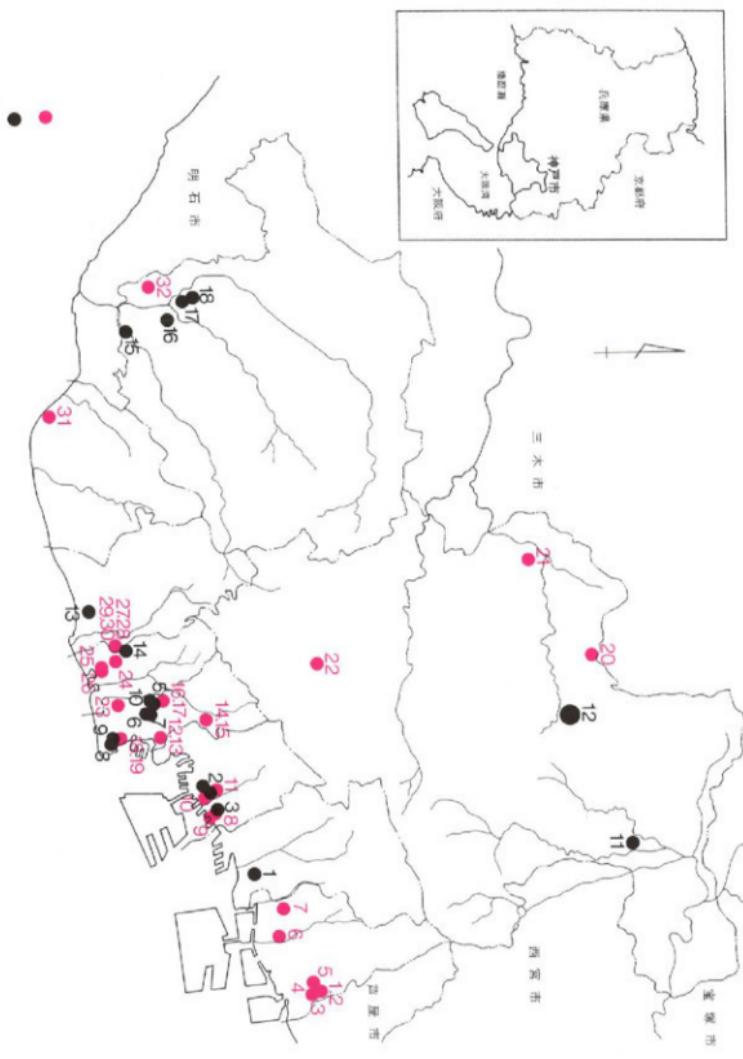
No.	調査名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延面積面積	調査期間	調査内容	調査原因
37	西門遺跡 第3次調査	須磨区中田町3丁目5-4、5-7、7-9、8-1、8-2、8-3、8-4、8-5各一部（別置東第二地区6-3号街区1号地）	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	20m <sup>2</sup> 折半	16.08.02～ 16.08.11	古生代中期の墓・「杭」、祝賀貿易の構・土坑・馬籠込みを確認。	新入住宅 (開発活動事業)
					30m <sup>2</sup>			
38	戎門遺跡 第3次調査	須磨区戎町3丁目1番地	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	130m <sup>2</sup> 390m <sup>2</sup>	16.08.21～ 16.09.21	遺構を4面から確認。翁牛前駆流式、時期不明のヒット群。初生代中期後半（2面）の円形窓穴住居・溝・土坑など。	古墳ビル (開発活動事業)
					25m <sup>2</sup>	16.11.22～ 16.11.24	旧塙跡の様子が差しく、周溝帯の一部と考えられる各も込みを確認したに留まる。	新入住宅 (開発活動事業)
					25m <sup>2</sup>			
39	戎門遺跡 第60次調査	須磨区中田町1丁目4番地の一部	神戸市教育委員会	中川さやか	25m <sup>2</sup>	16.11.22～ 16.11.24	旧塙跡の様子が差しく、周溝帯の一部と考えられる各も込みを確認したに留まる。	新入住宅 (開発活動事業)
					25m <sup>2</sup>			
40	舞子散策 第4次調査	舞子区舞子町2340-1	神戸市教育委員会	内藤俊哉	500m <sup>2</sup> 500m <sup>2</sup>	17.01.11～ 17.03.15	皆治松山遺跡の石柱（小口型・シノヘ型）を確認。石頭の基盤部には土台大と木札引を確認。出土品等全体の埋蔵状況を確認し、横浜の全容が判明。	追跡整備 (開発活動事業)
					500m <sup>2</sup>			
41	芦屋No.151清掃 第1次調査	芦屋区桜谷4丁目90、91、92	神戸市教育委員会	中川さやか	35m <sup>2</sup> 34m <sup>2</sup>	16.10.13～ 16.10.22	第1遺塙面では上辻5基、溝3基、ヒット8基を確認。第2遺塙面（学生時代受付）では落ち込み（空手印？）2基、上辻3基、ヒット3基を確認。臨時道路の発生？	新入住宅 (開発活動事業)
					33m <sup>2</sup>	16.11.08～ 17.03.02	開拓整備面では上辻5基、溝3基、ヒット8基を確認。第3遺塙面（学生時代受付）では落ち込み（空手印？）2基、上辻3基、ヒット3基を確認。臨時道路の発生？	新入住宅 (開発活動事業)
					33m <sup>2</sup>			
42	出合遺跡	芦屋区平野町中出門田、中出原、中出原、中出下、中出、中出、中出	神戸市教育委員会	藤井太郎・岡野 量	330m <sup>2</sup> 320m <sup>2</sup>	16.11.08～ 17.03.02	開拓整備面真に伴う6m×7mの試坑を調査。弘安時、元和時、15種代後期、二世の遺構、遺物包含層を分認。出土品約95点。	開拓整備 (開発活動事業)
					320m <sup>2</sup>			
43	玉津臼中遺跡	芦屋区下2丁目7番5	神戸市教育委員会	中川さやか	16m <sup>2</sup> 16m <sup>2</sup>	16.07.06～ 16.07.08	板垣面部分のみのトンネル更正。古墳時代後期？のヒット3基確認。	新入住宅 (開発活動事業)
					16m <sup>2</sup>			
44	越谷城跡 第8次調査	芦屋区谷町中央字北谷392	神戸市教育委員会	高畠 邦正	160m <sup>2</sup> 160m <sup>2</sup>	17.02.21～ 17.03.29	城郭復元・櫻花を確認。石壁上部から桜小枝類が集中して生え。物置台では小彌掛鏡。	追跡整備 (開発活動事業)
					160m <sup>2</sup>			

## 平成16年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）1

No.	調査名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延面積面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	西御吉遺跡 第3次発見	須崎区新在家南町3丁目135-1	神戸市教育委員会	鶴野 春	500m <sup>2</sup> 500m <sup>2</sup>	16.38.38～ 16.39.39	古生代中期と後生代に形成された5道の疊ね畠形式の蓄水池を確認。（甲羅・乙羅・丙羅・大邑羅・夏羅）	芯納
					100m <sup>2</sup> 100m <sup>2</sup>	16.07.12～ 16.07.26	西御吉遺跡の西隣接地？と古代の井穴・土坑等を確認。	古墳ビル
2	西友女塚古墳 第15次発見	須崎区新家3丁目5番、6番、52番の一部	神戸市教育委員会	鶴野 春	20m <sup>2</sup> 20m <sup>2</sup>	16.11.21～ 16.11.24	基礎柱脚上部分のろ盤青瓦施。縫隙時代前半の土坑・落込込みを確認。	新入住宅
					100m <sup>2</sup>			
3	日暮遺跡 第25次発見	中田区里井町1丁目565-1他4丁	神戸市教育委員会	山本雅知	100m <sup>2</sup> 100m <sup>2</sup>	16.06.14～ 16.06.18	基礎柱脚上部分のろ盤青瓦施。縫隙時代前半の土坑・落込込みを確認。	新入住宅
					100m <sup>2</sup>			
4	芦井遺跡 第18次発見	中央区里井町5丁目2-1	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	100m <sup>2</sup> 100m <sup>2</sup>	16.06.14～ 16.06.18	基礎柱脚上部分のろ盤青瓦施。跡に上蓋の小片が出土したが、透視は確認できていない。	芯納
					100m <sup>2</sup>			
5	芦井遺跡 第19次発見	中央区里井町3丁目339、338	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	60m <sup>2</sup> 60m <sup>2</sup>	16.07.26～ 16.07.26	学生時代初期の「」、中期後半の方型灰陶瓶、古生時代後期の柱穴などを確認。	新入宅
					570m <sup>2</sup> 570m <sup>2</sup>	17.03.24～ 17.03.31	基础部分のろ盤青瓦施。跡に上蓋の小片が出土したが、透視は確認できていない。	新間宅 H17戸に地級
6	寶珠遺跡 第20次発見	中央区芦ヶ崎町3丁目	神戸市教育委員会	月浦廉明・栗原代秀			基础部分のろ盤青瓦施・追築削除作業のみ	

平成16年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）2

No.	遺跡名	所在地	調査工作	調査担当者	測量面積 見調査面積	測定期間	調査内容	調査照査
7	兵庫府本荘塚跡 第1次調査	兵庫区松木通3丁目2	神戸市教育委員会 内務部教	内務部教	50㎡	16.30.15~ 16.06.21	隋唐時代の房伏跡と主張。下層には裸火灰、公園造成期～明治初期の埋蔵物あり。	公園造成
8	大高遺跡	兵庫区大高通4丁目(兵庫大間小学校付近)	神戸市教育委員会	後谷清介・ 内藤俊哉	35㎡ 70㎡	16.37.22~ 16.08.03	第1調査面では縄文時代の段痕、第2調査面では你生時代前半の瓦ら込み・上瓦を確認。さらに小量は平安時代初期の瓦も確認。	瓦水谷留傳
9	大高遺跡	兵庫区水木通5丁目4番1、3番2	神戸市教育委員会	後谷試吾	90㎡ 90㎡	16.11.09~ 16.11.24	12世紀後葉から13世紀後葉では近世地図、下層では房生時代初期の上層化層を確認。	共同住宅
10	兵庫出水跡 第3次調査	兵庫区切戸町6-20、21、23	神戸市教育委員会	内藤俊哉	70㎡ 70㎡	16.19.12~ 16.11.25	兵庫城跡と出水跡の発見。兵庫城跡や動植物の北西隅に近い側線の石室を示す痕跡を確認。	共同管理施設
11	兵庫塙跡 第3次調査	兵庫区たる塙町4丁目1	神戸市教育委員会	藤井太郎	800㎡ 2,400㎡	12.32.07~ 17.03.31	3面の遺構面を確認。中世末の瓦・柱穴、江戸時代の柱頭瓦・柱頭・上瓦、基壇開削層を確認など。	共同住宅
12	上ノ道跡	兵庫区上ノ道通8丁目19番11	神戸市教育委員会	後谷試吾	40㎡ 125㎡	16.11.26~ 16.12.09	4面の遺構面を確認。房生時代～光明時代初期の柱頭瓦・柱頭・上瓦・瓦・土器・瓦ら込み・保真時代の土器などを確認。	共同住宅
13	八多中遺跡	北区八多町中字三ノ木、字尾原、字通ノ一	神戸市教育委員会	阿部敬凸	350㎡ 350㎡	16.12.05~ 16.12.14	1～4区のトレント調査。下層の柱穴、ピットなどを確認。	区间便益
14	野瀬遺跡 第5次調査	北区淡河町野瀬	神戸市教育委員会	原島 宏	2,350㎡ 2,350㎡	16.94.01~ 17.01.28	4区で柱穴・杭跡・瓦などを探査。	共同管理
15	行寺2遺跡 第5次調査	須磨区行寺町3丁目	神戸市教育委員会	阿部敬凸	1,200㎡ 1,300㎡	16.01.14~ 16.10.30	5区～5次～6次調査。平安時代の割立瓦焼物・上瓦・柱・溝・瓦刀・ピットなどを確認。	区间便益
16	周船引遺跡 第1次調査	須磨区周船町1丁目1番	神戸市教育委員会	岡野 重	350㎡ 350㎡	16.10.04~ 16.11.17	防空壕・施場・平安後期、鎌倉の3時期の埴輪を確認。柱穴・溝・土坑・落込・瓦等。	共同住宅
17	寒風遺跡 第3次調査	西区伊丹市寒風字寒風174番4、174番5	神戸市教育委員会	阿部 敦	150㎡ 150㎡	17.05.14~ 17.05.30	平安時代後期の瓦・土坑・柱穴・ピットを探査。	共同住宅
18	吉生久遺跡	西区吉生町3丁目8-2、7-3、12-32、27	神戸市教育委員会	川辺さやか	1,670㎡ 1,670㎡	16.12.14~ 17.05.31	平安時代後期～光明時代後期の焼穴焼瓦・溝などを集中して探査。次年度に復査。	区间便益 H17年度に実施
19	出合遺跡 (出合城跡)	西区上津町出合字坂間ヶ坪558番	神戸市教育委員会	舟津章樹	90㎡ 90㎡	17.02.14~ 17.02.22	中世の瓦・落込などを確認。	区间便益
20	今津遺跡 第17次調査	西区茨木市今津字	神戸市教育委員会	船原 宏	12.5㎡ 24.5㎡	16.10.18~ 16.10.25	御生時代後期の壺形約5kgの内燃型火生瓦(燒失性)。古墳時代中期以降の瓦・土坑などを確認。	宝塚造成
21	片生遺跡	西区兵庫町片生甲第10-1、102-6	神戸市教育委員会	後谷試吾	40㎡ 40㎡	16.07.06~ 16.07.16	古墳時代後期(奈良式瓦)の溝・上坑などを確認。下層では下漢の吐器小口状の遺構面を落込	米謹
22	玉串舟穴遺跡	西区串町下村	神戸市教育委員会	後谷試吾	60㎡ 60㎡	15.10.14~ 15.10.23	中層～中世のピット・落込などを確認。	東落清水



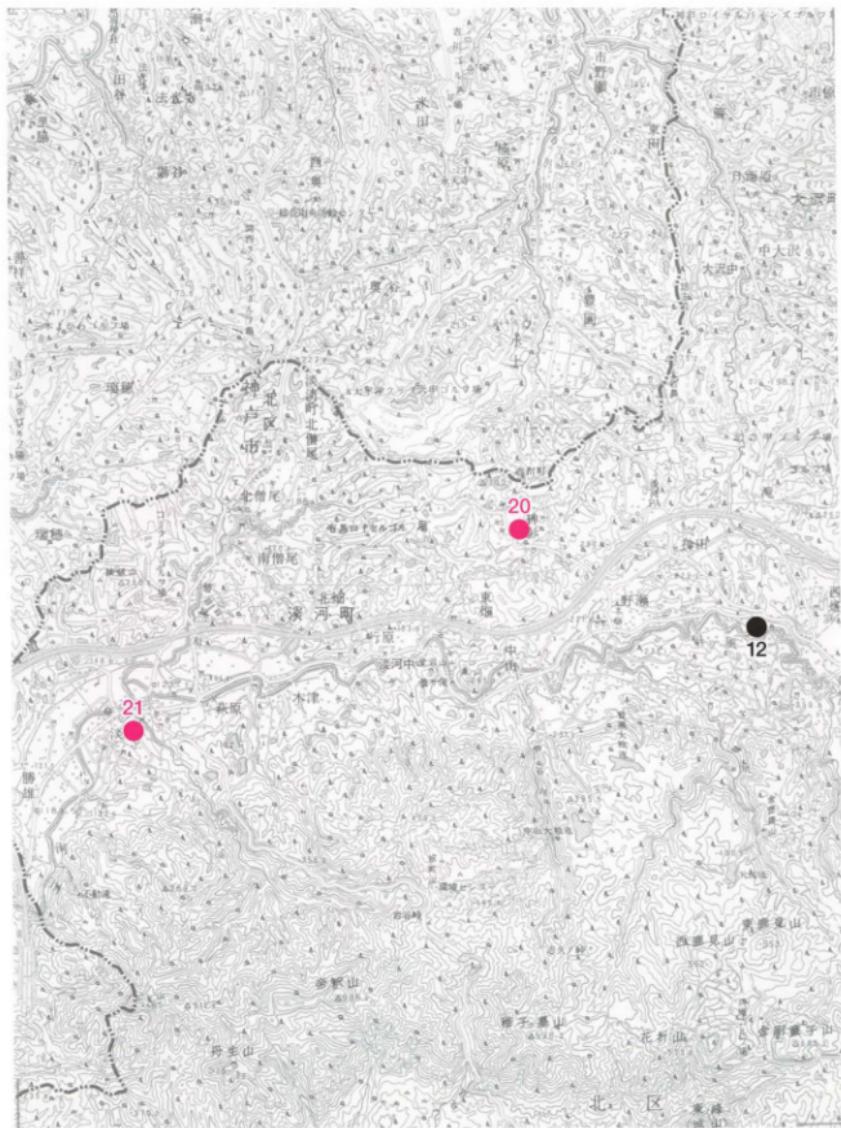
平成16年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図  
(各遺跡の番号は掲載道路と一致)



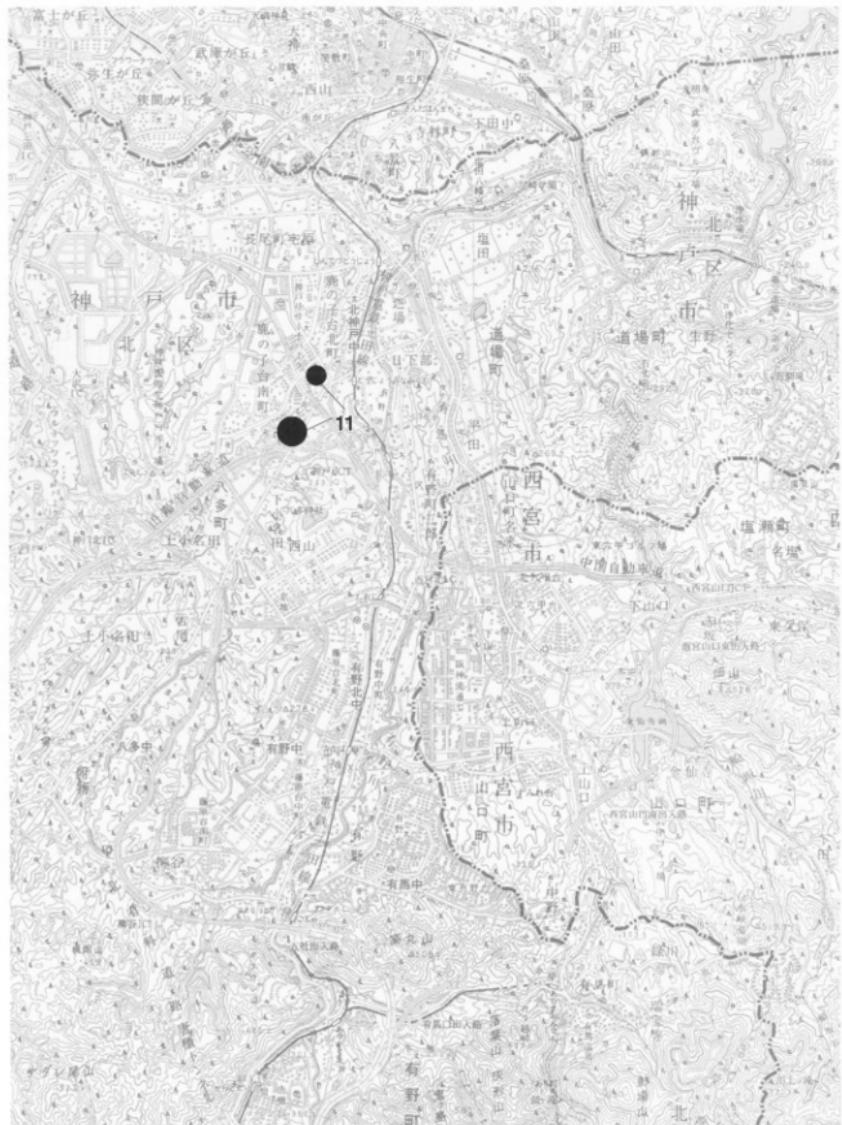
調査地点位置図（1）



調査地点位置図（2）



調査地点位置図（3）



調査地点位置図（4）



調査地点位置図（5）

## II. 震災復興調査の10年

### 1.はじめに

阪神・淡路大震災からの復旧・復興事業も10年が経過し、復興土地区画整理事業でも住宅の再建が進み、街は震災前と変わらないまでに復興してきた。震災直後から復興事業に伴って事前に埋蔵文化財発掘調査を進め、その5年目までの歩みについては、「復興調査の5年間を振り返って」(『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』2002)の中で紹介した。ここでは震災6年目から、10年目までのその後の状況について報告することにする。震災時の全国の自治体からの発掘調査支援は平成9年度まで、その後は兵庫県の単独支援が行われたが、それも平成12年3月で打ち切られ、震災6年目からは神戸市単独で取り組むことになった。街中の復興事業も徐々にすすみ、6年目からの発掘調査は、権利関係の調整で遅れが生じた兵庫区と長崎区・須磨区内の土地区画整理事業地と再開発事業地が主な対象となった。

### 2. 基本方針の適用修了

平成12年3月まで延長された「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いに関する基本方針」の適用期間が切れ、埋蔵文化財の保護制度上、震災時の特例は廃止された。それを受けて補助制度の適用対象も変更された。

震災直後、被災者への早期住宅供給を目的として、阪神淡路大震災の復旧・復興事業にかかる住宅の建設には、補助金で発掘調査を実施してきたが、震災6年目から適用範囲が狭まり、被災者が行う被災建物の復旧・復興事業に対象が限定された。<sup>2</sup>そのため震災後に補助を受け、住宅建設した事業者との平衡性を保つ観点から、平成14年6月から一定の要件を備えた個人事業者と零細事業者には、発掘調査費用の負担を軽減する制度を設けた。

### 3. 届出件数に見るこの間の推移

震災6年目にあたる平成12年度の文化財保護法第57条2に基づく届出件数は、前年の平成11年度から建築確認閲覧を開始したこともあり759件あった。その後は表にみると600~700件前後で推移している。事業原因をみると各年度とも届出件数の中で、全体の60%前後を占めるのが個人住宅建設である。一方、ピーク時で116件を数えた発掘調査件数は徐々に減少し、平成15年度には半数強の66件に減少、復興発掘調査件数もピーク時の89件から平成16年度には40件に減少した。同様に復興調査面積も平成8年度ピーク時の87,913m<sup>2</sup>から平成16年度には11,747m<sup>2</sup>に減少した。これはとりも直さず土地区画整理事業などが遅れている地区を除き、復興事業が順調に進んでいることを物語るものである。<sup>2</sup>震災復興土地区画整理事業は、7地区（森南地区・鷹取東第一地区・同第二地区・御菅東地区・同西地区・兵庫松本地区・新長田駅北地区）で、当初平成16年度末完工の予定であったが、概ね2年ほど延長されることになった。

### 4. 平成12年度から16年度までの復興調査事業の概要

震災直後、復興事業で発生が予想される発掘調査事業量を54haと試算したが、そのうち復興事業で遺跡に影響が及ぶ部分を調査した。平成11年度までに約31ha、平成16年度までに約37haの調査を終えた。復興調査の試算面積は、面的造成を想定したものであり、個々の住宅建設で調査が及ぶのはその7割程度であることから、16年度末までに予想事業

量の9割の発掘調査を終えたと認識している。発掘調査は年々小規模化し、調査面積100m<sup>2</sup>未満の事業が各年度5割前後をしめる。これは復興調査の対象が個人住宅が主であったことと、工事により影響を受ける部分に限定されたことを示している。一方500m<sup>2</sup>以上の事業は各年度15%程度に止まっている。費用の面からみると、この間の復興調査に要した経費は、震災後5年までが2,138,720千円、震災後6年～10年までが592,032千円、合計2,730,752千円である。

平成12年度の復興事業にかかる発掘調査件数は全体で72件。そのうち個人住宅建設にかかる調査は39件、復興土地地区画整理事業地内の事業や再開発事業地内の発掘調査15件を含め、被災地の復興にかかる調査が全体の75%を占める。その他の主要な事業は街路事業・共同住宅建設に伴う発掘調査事業である。

平成13年度は全体の復興調査件数は51件、そのうち個人住宅建設23件、区画整理事業や再開発事業などあわせて10件あり、被災地の復興にかかる調査が全体65%を占める。その他は街路事業と13年度から着手した跡跡保存目的の範囲確認調査などが含まれる。

平成14年度は全体の復興調査件数は57件、そのうち個人住宅17件、区画整理事業、再開発事業あわせて16件、被災地の復興にかかる調査が全体の58%を占める。その他は共同住宅建設と保存目的の範囲確認調査などが増加している。

平成15年度は全体の復興調査件数は49件、そのうち個人住宅18件、区画整理事業、再開発事業あわせて13件、被災地の復興にかかる調査が全体の63%を占める。その他事業では、共同住宅建設と保存目的の範囲確認調査などが増加している。

平成12年度～16年度の文化財保護法届出件数、発掘調査件数・面積の推移

届出等	年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	計
法57-1届出		2	1	2	0	0	5
法57-2届出		759	636	574	597	696	3,262
法57-3届出		52	53	48	59	42	254
法57-5, 6		0	0	0	1	0	1
法58-2通知		87	71	38	70	35	301
開発事前審査等		149	130	150	126	139	694
試掘調査依頼		302	295	283	277	245	1,402
発掘調査件数		116	85	77	66	67	411
面積(m <sup>2</sup> )		44,550	28,205	21,024	20,040	20,709	134,528
内 訳	復興調査件数	72	51	57	49	40	269
	面積(m <sup>2</sup> )	21,040	14,344	9,336	13,504	11,747	69,971
内 訳	通常調査件数	44	34	20	17	27	142
	面積(m <sup>2</sup> )	23,510	13,861	11,688	6,536	8,962	64,557

平成16年度は全体の復興調査件数40件、そのうち個人住宅13件、区画整理事業、再開発事業あわせて12件、復興調査の割合は全体の63%を占める。それ以外では、共同住宅・店舗・商業ビルの建設、保存目的の範囲確認調査などが顕著な増加を示している。

## 5. 復興事業に伴う発掘調査成果の公表と公開

復興調査成果を広く市民・研究者に公表・公開するため、遺跡現地公開と報道機関への情報提供ならびに発掘調査報告書の刊行を行った。報告書は、各年度の埋蔵文化財年報を含め、12年度10冊、13年度6冊、14年度8冊、15年度8冊、16年度6冊の合計38冊を刊行した。この間の調査で注目を集め、遺跡公開あるいは情報提供した遺跡には以下のものがある。**12年度** 深江北町遺跡草屋駅家・新方遺跡人骨着装指輪 **13年度** 真光寺旧境内・住吉宮町遺跡瓦き石をもつ方墳群・西求女塚古墳撥形に開く前方部 **14年度** 兵庫津遺跡柳原廻惣門・小路大町遺跡の奈良時代馬鍔 **15年度** 舞子砲台・兵庫津遺跡大輪田泊・御影古酒蔵群・白水瓢塚古墳粘土郭など。

復興調査の成果を地域の市民に理解してもらうため、展示した例を紹介しておきたい。まちかどギャラリーは兵庫津遺跡第15次調査の後、兵庫区七ノ宮町2丁目の現地に建ったマンションの1階ロビー内に開設された展示コーナーに、江戸時代の町屋の出土品37点と写真パネルを展示して、平成13年6月4日にオープンした。15次調査の出土品をマンション住民はもとより地域の住民にも公開したいという開発者の申し出に協力したものである。「アスクにづか発掘展」は、平成16年3月6～14日に新長田駅南再開発地区ビル内のアスクにづか4番館ギャラリーで、中世の二葉町遺跡の出土品を公開した。

震災から10年を迎える平成17年1月に神戸市立博物館で「発掘された日本列島2004」展が開催され、その地域展「震災から10周年—発信する地域文化」では、被災市町が協力して、震災から10年で明らかになった地域の歴史を展示した。また展示に関連して博物館講堂で講演会「震災後の遺跡調査と新たな町づくり」（1月16日）とシンポジウム「震災が明らかにした歴史」（1月29日）を開催した。

## 6. 復興事業に伴う隣接市支援

震災5年目までの他府県並びに兵庫県からの発掘調査支援が打ち切られ、芦屋市では都市計画道路山手幹線建設に伴う発掘調査事業に対応するため、調査支援を県に求めたが、県の事業量増加で県から神戸市に芦屋市支援の話を持ちかけられた。神戸市では公共事業も進捗しつつあり、神戸市にとっても総延長600mの山手幹線の全線開通は、阪神間の動脈としては重要で不可欠との判断から、その復興事業を円滑に進めるために、路線内の発掘調査を支援することになった。

支援に伴う文化財の取り扱い、出土品の帰属、調査報告書の刊行などの基本事項については、県と神戸市と芦屋市で協定書を交わし、地方自治法第252条14～16の自治体間の事務の一部委託方式で支援を行うことにした。事業地内の調査対象遺跡は寺田遺跡、月若遺跡、業半遺跡で、事業期間は平成12年度から平成16年度までの5年、予定発掘調査面積は14,500m<sup>2</sup>である。なお家屋の立ち退き等の遅れから、調査支援期間は2年間延長された。

## 7. この間の新たな取り組み—史跡指定、保存目的調査と地域との連携—

平成6年12月の調査終了後、継続調査する予定であった西求女塚古墳は、震災で被災者の避難場所になり調査再開は困難であったが、震災後5年が過ぎて漸く条件も整い、平成13年2月調査再開にこぎつけた。しかし地震後、空き地のまま放置されていた古墳南側の工場跡地は、飲食店に貸貸されることになり、古墳南側を解明しようとした地震前の計画は

変更を余儀なくされた。そこで公園内の解説に重点をおき、前方部が撥形に開くことなどを突き止めた。平成14年10月には、西求女塚をめぐる考古学や自然科学の課題について討議するためにシンポジウムを開催し、16年3月にその成果を反映した報告書を刊行した。翌年、調査着手から20年を経て平成17年3月2日に国史跡指定を受けた。また長年の懸案であった白水瓢塚古墳の保存も主体部の確認調査で成果を上げ、事業者の理解も得て平成16年3月9日に県史跡指定を受けた。また、地域の史跡を残し活用しようという気運が生まれ、端谷城・淡河城の環境整備を住民と行政が協働で取り組み<sup>1)</sup>、遺跡内容把握のため保存目的の調査を開始した。震災10年目の平成17年1月29・30日に神戸で国連防災世界会議が開催された。防災で初めて文化遺産が取り上げられ「文化遺産を災害から守るために」というテーマでユネスコ事務局長は講演会とシンポジウムが行われた。

#### 8. この10年のあゆみを振り返って—おわりに

震災から10年間の市内での発掘調査は総計970件、試掘調査は2,716件、その資料蓄積は膨大なもので、市内の地下の埋蔵文化財包蔵状況がかなりの精度で押さえられた。またそのデーターは、開発指導の埋蔵文化財情報管理システム構築の基礎資料にもなった。今後は埋蔵文化財ハザードマップの作成も視野に入れ、この蓄積資料を活かす必要がある。

震災で市民の意識も大きく変わり、大災害時に地域を守るのは地域社会であることが確認された。埋蔵文化財調査で明らかになった先人の歴史が、住民が地域に誇りと愛着を持って住み続ける自信を与えたことも理解された。地域の減災・復興に、地域文化を共有する住民の力が大切だと認識されたが、震災で確認された個人が大切にされる地域社会の形成に、文化財を通して学ぶ文化力がその土台となることを力を説して結びとしたい。

##### 注

- 震災復旧地区画整理事業仮換地進歩率（平成16年9月末現在）  
森南地区90%・蘆原東第一地区100%・同第二地区89%・御菅東地区100%・同西地区99%・兵庫松本区97%・新長田駅北地区86%
- 平成12年度～16年度の復興補助金（単位：千円）

12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	合計
168,680	138,690	109,182	91,942	88,558	592,032

- 地域住民と行政が、共に地域に残る史跡を地域おこしに活かそうとした取り組みは、渡辺伸行・横崎清孝「史跡を地域に活かす—神戸市戦国期の山城櫻境整備事例—」『遺跡学研究』第1号 2004 参照。



fig.15 まちかどギャラリー



fig.16 震災10周年シンポジウム

### III. 平成16年度の復興事業に伴う発掘調査

#### 1. 森北町遺跡 第21次調査

##### 1. はじめに

六甲山南麓の斜面地に立地する遺跡、特に弥生時代の遺跡は東から東山・森奥・坂下山・森北町・金鳥山・保久良神社・荒神山・赤塚山と古くから数多くが知られている。一方、厚く堆積した洪积砂に覆われる郡家・住吉宮町・本山など平野部の遺跡についても近年その内容がかなり明らかになってきている。森北町遺跡は六甲山南麓、東の芦屋川・西の高橋川にはさまれる傾斜地に立地し、南の平地への傾斜変換点付近には出口遺跡が隣接する。

森北町・出口の両遺跡は内容が共通し、同一の集落遺跡であると把握される。森北町遺跡は、1964年にその存在が確認された遺跡で、これまでの調査により弥生時代・古墳時代・飛鳥時代・平安時代などの遺構・遺物が確認されている。とりわけ、ここからは中國製鏡・銅鐸・国内の他地域から搬入された古式土師器・陶質土器・初期須恵器などが出土しており、これらから弥生時代から古墳時代にかけて当地は他地域との交流の拠点となり、宝器あるいは貴重な文物を所有しうる有力な集団の居住していたことが推測される。出口遺跡の第5次調査においては古墳時代末期に仏教とともに日本に移入された銅鏡の破片が出土しており、この時期に至っても有力集団が当地に居住していた可能性を示す。



fig.17  
調査位置図  
1:2,500

##### 2. 調査の概要

調査の結果、2枚の遺構面が確認された。

**第1遺構面** 5a層下面で検出される遺構面。掘立柱建物・柱穴・溝・鋤溝・土坑等が検出された。中世の遺構面。

**掘立柱建物** 調査区全域で柱穴多数が確認された。これまでに建物として把握できたものが2ないし3棟ある。柱穴は径30~40cmのプラン円形のもので比較的小規模な建物と思われる。主軸はほぼ南北ラインに合致するものと東西に傾くものと2種がある。

**鋤溝** 鋤溝と溝は北西-南東のラインで併行するものがある。地形に沿う区画溝と鋤溝と考えられる。

第2遺構面 5b層下面で検出される遺構面。弥生時代末ころの遺構面。柱穴・溝・竪穴住居状の遺構が検出された。

S B04 調査区の南東で検出された遺構。東西行する溝が圓円状に屈曲し、その南側が住居址状に一段下がる。住居址と確定できないが、そうであれば東西6m以上のプラン圓円方形の竪穴住居となる。調査区南端で床面がさらに一段下がる。住居址だとすれば北の溝とこの段の間がいわゆるベッド状遺構となるかもしれない。

溝 S B04の埋没後、縦横に溝が掘削される。性格不明。

3. まとめ 第2遺構面で確認された弥生時代末の遺構・遺物は周囲で確認されている状況と共通する。しかし、これまでの森北町遺跡・出口遺跡の調査では、多く斜面地末端の比較的低い地点において古代・中世の遺構が確認され、標高の高い地点にはこの時期の遺構は稀薄であった。今回の調査により高位地区においても中世の遺構がまとまって存在することを確認できたのは新しい知見となる。

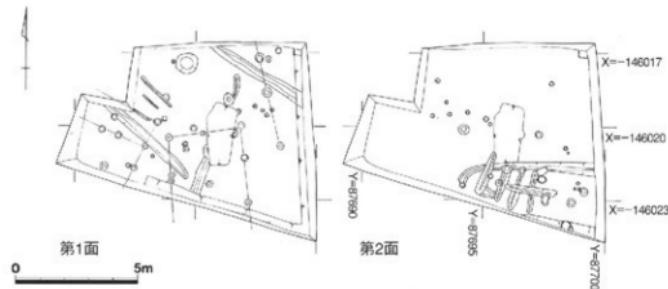


fig.19 第2遺構面全景

fig.18 調査区平面図・断面図

## 2. 森北町遺跡 第22次調査

### 1. はじめに

森北町遺跡は、六甲山南麓の丘陵裾部～段丘部分に位置している。遺跡の周囲には高橋川、要玄寺川等が南流している。弥生後期～古墳時代後期の集落を主として、奈良時代前期、平安時代末～中世前期と中世後期の集落も確認できる、複合遺跡である。

調査地は遺跡の北端部に位置し、地形的には丘陵裾部となる。

fig.20  
調査地位図  
1:2,500



### 2. 調査の概要

今回は個人住宅の建設に伴い、遺跡が破壊される地下駐車場の建設予定部分に限り、調査を実施している。

#### 基本層序

基本層序は表土、淡黄褐色砂質土、灰黃褐色砂質土、灰褐色砂質土（中世後期洪水砂）、淡黒褐色砂質土（中世前期遺物包含層）、暗褐色砂質土（弥生後期遺物包含層、上面が第1造構面）、暗黃褐色砂質土（上面が第2造構面、弥生土器を含む）、暗灰色大礫混じり砂質土（無遺物）、淡灰褐色砂質土（無遺物）、黃灰褐色砂質土（無遺物）、黃褐色砂質土（無遺物）、以下は工事影響深度より下層となる為、未調査となる。

#### 検出遺構

遺構は第1造構面から中世後期の井戸が確認された他、第2造構面から弥生後期の柱穴や小溝が確認されている。第2造構面より上層で中世前期遺物包含層が確認されているが、中世前期の遺構は検出されなかった。また、第2造構面より下層でも弥生土器（細かな時期は不明）が出土しているが、遺構は検出されなかった。

#### 出土遺物

遺物は、灰褐色砂質土から中世後期の土器（備前焼の擂鉢等）が出土したほか淡黒褐色砂質土から中世前期の土器（須恵器、土師器、白磁）が出土し、暗褐色砂質土から弥生後期の土器が出土している。また、暗黃褐色砂質土から時期不明の弥生土器が出土している。

遺構内では、第1造構面の井戸から中世後期と考えられる備前焼の擂鉢片や土師器片が出土した他、第2造構面の柱穴や小溝から弥生後期の土器片が出土している。

#### 第1造構面

上面を中世後期の洪水砂で覆われている造構面で、井戸を1基検出した。

#### S E 101

調査区の北端から検出した、乱積式石組井戸である。井戸の北半は調査区外へと続く。また工事の影響深度の関係で、地表面-70cmまでの調査で、下層は地下保存としている。

井戸の掘形は、ほぼ円形であり径約2.2mを測る。井戸の石組内は径約1.4mであり、深

さ約70cmまで調査している。石組みは4段を確認している。

遺物は井戸本体の内部から備前焼の播鉢片が出土しており、中世後期に機能していた事が判る。井戸の掘り方からは遺物は出土していない。

**第2遺構面** 遺構内の遺物から、弥生後期と判る遺構面である。小溝と柱穴を多数検出している。柱穴は10基以上を検出したが、建物や柵列等の並びは確認できなかった。

**柱穴群** 幅約18~35cmで、深さ約20~60cmを測る柱穴である。弥生後期土器の細片が少量出土している。調査区の全体から検出され、建物や柵列としての縦まりは確認できなかった。

**小溝群** 幅約18~90cmで、深さ約10~25cmを測る小溝である。弥生後期の土器が、比較的多く出土している。

南北方向と、それに直交する東西方向の溝がある。ただし、この溝群の機能的な性格については、不明である。

**3. まとめ** 中世後期では、井戸が検出された事実から、周囲に集落が存在することが確認できた。過去、森北町遺跡では第12次調査で中世後期の土坑等が確認されているが、今回の第22次調査地とは位置的に離れている。これ以外の調査では中世後期の遺構は確認されておらず集落の範囲や規模等詳細は不明である。

また中世前期では、遺物包含層が確認されているものの遺構は確認されなかった。ただし、遺物量は比較的多く今回の第22次調査の近辺も含め、遺跡の広範囲にわたって平安時代末~中世前期にかけての集落の存在を追認することになった。

弥生後期には、柱穴群と小溝群が確認されている。森北町遺跡は弥生後期~古墳時代前期にかけて、周囲の中核的集落となっている。第22次調査の西に接した第21次調査で竪穴住居が確認されている事も含め、周囲には集落の主体となる部分が存在している事実は明らかである。

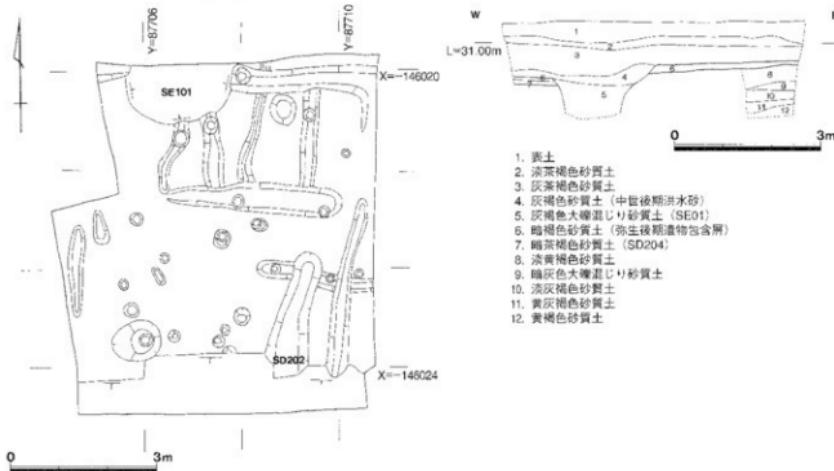


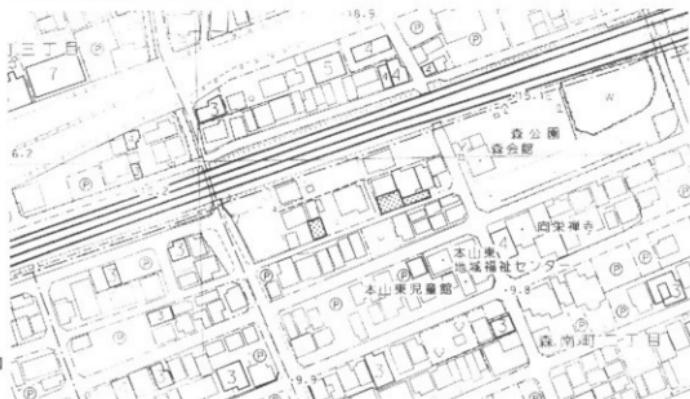
fig.21 調査区平面図・断面図

## 1. はじめに

森南町遺跡は六甲山系南麓の沖積地に立地する遺跡である。周辺には規模の大きな河川はほとんどなく、小河川である高橋川が遺跡西端を区切るように位置している。また周辺の地形観察から遺跡の北側には段丘崖が想定され、それより北側は森北町遺跡が立地する段丘面となる。

この遺跡は、平成13年度に土地区画整理事業に伴って発見された新しい遺跡である。平成14・15年度にJRの南側に沿って街路築造部分の発掘調査が実施され、室町時代頃と弥生時代後期の遺構や遺物が確認されている。

今回の調査も復興土地区画整理事業に伴うもので、調査地点は第1・2次調査の街路に南隣する街区の南辺である。



2. 調査の概要　調査区は連続せず3ヶ所に分割されているため、調査順にそれぞれ3-1～3次調査とした。以下それぞれの調査について記述していくこととする。

## 第3-1次調査

3ヶ所の調査区のうちの中央で、概ね「L」字形をした調査区である。

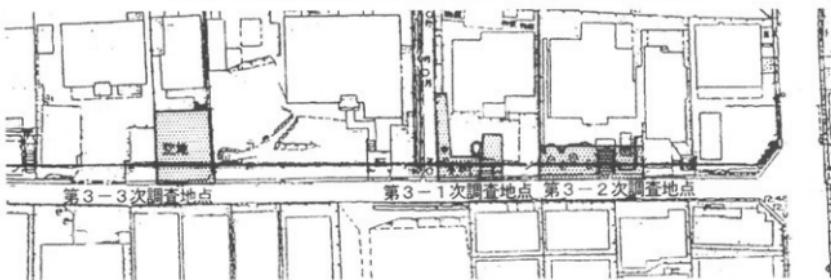


fig.23 調査区配図

**基本層序** 上から順に現代盛土、既存石垣裏込、宅地化直前の耕作土、地山と続く。遺構面は地山の上面で、溝1条・土坑1基・旧河道1条・ピット1基を検出した。

**S D01** 調査区の東辺で検出した南北方向の溝である。溝の北端と東肩は調査区外に続き、南端は既存の石垣で破壊されているため全長と幅は不明であるが、長さ1.6m以上、幅0.7m以上である。底には起伏があり、深さ25~40cmである。断面は逆台形で、埋土は上から順に茶灰色礫混じり土、茶灰色粘質土、茶灰色粘質土、灰色粘質土、茶灰色粘質土である。遺



fig.24 第3-1次  
調査区全景

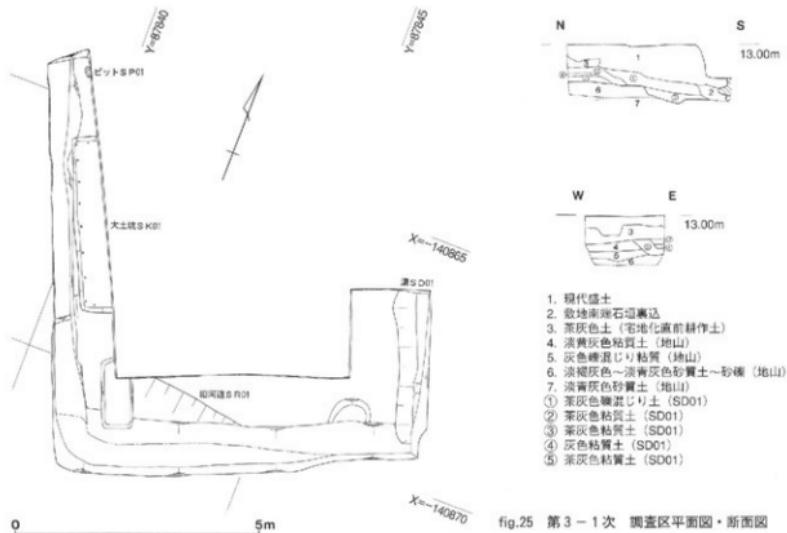


fig.25 第3-1次 調査区平面図・断面図

物は土師器が微量と、鉄滓が1点出土した。土師器は細片ではあるが中世頃のものである。

**S K01** 調査区の西辺東寄で検出した大きな方形の土坑である。東側は調査区外に続くため全体の規模は不明であるが、南北長3.6m、東西幅0.6m以上である。周囲からはほぼ垂直に掘り込まれるが、底面は平坦である。また底面の周囲には約50cm間隔で杭が打ち込まれており、使用されていた時点では周囲に板が杭で留められていたと推定できる。上面が現代盛土で覆われているため削平されている可能性が高いが、深さは現状で約65cmである。埋土は上から順に黄茶色シルト、灰黄色シルト、淡茶色シルト、灰色砂混じりシルトで、遺物は土師器・陶磁器・瓦が出土した。形状や出土遺物、上面に耕作土が遺存していなかったことから江戸時代頃の建物内部の床下収納施設であると考えられる。

**S R01** 調査区の南西隅で検出した旧河道である。北東側の肩を検出したのみで長さや幅は不明であるが、現状で5.2m以上、幅1.8m以上である。断面は浅い鉢状で、深さ約80cmである。埋土は上から順に黄茶色砂混じりシルト、灰色シルト～砂、白褐色砂と続く。遺物は弥生時代後期の土器が少量出土した。平成15年度の街区部分の調査でも弥生時代の旧河道を検出しており、その南側延長部分の可能性がある。

**S P01** 調査区北西隅で検出したピットである。東側の一部が調査区外に続くが、長径約20cm、短径約15cm、深さ約20cmである。断面は「U」字形、埋土は淡灰色シルトで、遺物は出土しなかった。

**小結** 今回の発掘調査では北側の街路部分の調査と異なり、遺構面が一面しか確認されなかつた。後世の削平によって同一面化しているものと考えられる。

### 第3－2次調査

3ヶ所の調査区のうちの東側であるが、既設の擁壁による攪乱で破壊されているため遺構面の遺存状況が極めて悪かった。またさらに東側隣接地も当初は発掘調査対象地点であつ

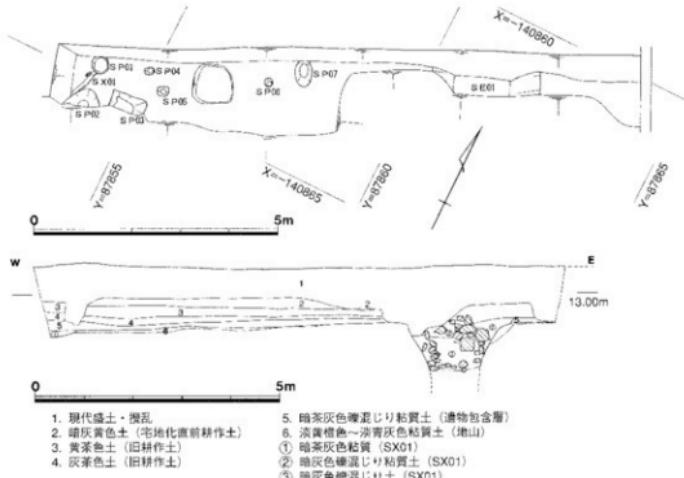


fig.26 第3－2次 調査区平面図・断面図



fig.27 第3-2次  
調査区全景

たが、既存の雍蔵や駐車場のため遺構面が全く遺存していなかった。

**基本層序** 上から順に現代盛土、宅地化直前の耕作上、旧耕作上が2層、遺構面基盤層、地山と続く。遺構は地山の上面で検出したが、北壁の土層観察では井戸のみ1層上の遺構面基盤層から掘り込まれていたことが判明した。従って遺構面としては2面存在していたことになる。井戸1基・落ち込み1基・ピット7基を検出した。またこの遺構面基盤層は本来ならば遺物包含層になるものであるが、今回の調査において、遺物は出土しなかった。

**S E 01** 調査区の北辺東寄で検出した井戸で、これのみ1層上の遺構面基盤層から掘り込まれていた。北側は調査区外に続き、南側は搅乱で破壊されているため幅約0.4mを検出したのみである。従って井戸の平面形状は不明であるが、埋土から側材であったと可能性がある人頭大程の石材が多量に含まれていたため、本来は直徑2.1mの石組井戸が崩されたものと考えられる。深さ約100cmまで検出したが、それ以下は工事影響深度以上となるため掘削を終了した。埋土は上から順に暗灰色粘質土、暗灰色礫混じり土である。遺物は土師器が微量出土したのみであるが、石組の井戸であること、1層上から掘り込まれていること、北側の街路部分の調査成果から判断して室町時代頃と考えられる。

**S P 01** 調査区の北西隅で検出した円形のピットで、直徑約35cm、深さ約5cmである。断面は浅い皿状で、埋土は褐灰色粘質土、遺物は出土しなかった。

**S P 02** 調査区の南西隅で検出した円形のピットである。南側が搅乱で破壊されているため全体の規模は不明であるが、直徑約70cm、深さ約20cmである。断面は椀状で、埋土は淡褐灰色粘質土、遺物は弥生土器が微量出土した。

**S P 03** 調査区の南辺で検出した方形のピットである。南側が搅乱で破壊されているため全体の規模は不明であるが、一辺約75cm、深さ約20cmである。断面は椀状で、埋土は灰褐色礫混じり土、遺物は土師器が微量出土した。

**S P 04** 調査区の北辺西寄で検出した円形のピットで、長径約20cm、短径約15cm、深さ約10cmで

- ある。断面は楕状で、埋土は暗茶灰色粘質土、遺物は出土しなかった。
- S P05** 調査区の西寄で検出した円形のピットで、直径約20cm、深さ約20cmである。断面は「U」字形で、埋土は暗褐色粘質土、遺物は出土しなかった。
- S P06** 調査区の中央西寄で検出した円形のピットで、直径約20cm、深さ約5cmである。断面は楕状で、埋土は暗褐色粘質土、遺物は出土しなかった。
- S P07** 調査区の北辺中央で検出した楕円形のピットである。北端の一部が調査区外に続くが、長径約60cm、短径約35cm、深さ約15cmである。断面は楕状で、埋土は灰色砂質土、遺物は出土しなかった。
- S X01** 調査区の北西隅で検出した浅い落ち込みである。一部分を検出したのみであるため全体の規模は不明であるが、長さ0.9m以上である。深さ約5cmであるが、底面の1ヶ所にはさらに約5cm深くなる部分がある。埋土は暗茶灰色粘質土で、遺物は出土しなかった。
- 小結** 道構面の遺存状況が極めて悪かったため、調査中に壁面で確認したものではあるが、今回の一発掘調査では室町時代頃の道構面と弥生時代頃の道構面の二面を確認することができた。このことは北側の街路部分の調査と同様で、3-1次調査とは異なり後世の削平を免れていたことが明らかとなった。

### 第3-3次調査

- 3ヶ所の調査区のうちの西側で、長方形の調査区である。掘削土置き場の関係上から東西に二分割し、反転して調査を実施した。
- 第1道構面** 基盤層である遺物包含層の出土遺物から室町時代頃と考えられる道構面で、溝1条・井戸1基・土坑1基・ピット3基を検出した。
- 基本層序** 上から順に現代盛土、宅地化直前の耕作土、遺物包含層、地山と続く。第1道構面は遺物包含層の上面、第2道構面は地山の上面である。
- S D101** 調査区の西辺で検出した南北方向の溝である。溝の北端は調査区外に続き、南端は既存の石垣で破壊されているため全長は不明であるが、長さ6.5m以上、幅0.6~0.9mである。方向が南端で少し西に振っている。深さは約40cmであるが、南端近くで急に底が深くなってしまっており、その部分の深さは60cmである。断面は逆台形~「U」字形で、埋土は場所によって少し異なるが、灰色系の砂混じり粘土~砂礫である。遺物は土師器の他に江戸時代頃の陶磁器が出土したため、第1道構面で検出したが、さらに上層から掘り込まれていた可能性が高い。
- S E101** 調査区の西端北寄で検出した井戸で、これのみ1層上の旧耕作土上から掘り込まれていた。平面形は楕円形で、長径1.8m、短径1.6mである。深さは約120cmで、埋土は上から順に淡褐色砂、淡黄茶色粘質土、淡灰色微砂、淡灰色粘質土、灰色礫混じりシルトである。



fig.28 第3-3次 調査区断面図

井戸枠は存在しなかったが、掘り込まれた当初から素掘りであったのか、枠材が抜き取られたのかは判別できなかった。遺物は出土しなかったが、1層上から掘り込まれていることから江戸時代頃と考えられる。

S K101 調査区の東辺北寄で検出した少し角張った円形の土坑である。直径0.7m、深さ約25cm、断面は浅い「U」字形である。埋土は黄橙色粘質土混じり淡褐灰色土で、遺物は出土しなかった。

S P101 調査区の西辺南寄で検出した椭円形のピットである。東側の一部が溝 S D101で切られているが、長径約40cm、短径約30cm、深さ約20cmである。断面は最深部が丸く窪んだ椀状で、底が埋土は上から順に淡灰茶色砂質土、淡褐灰色粘質土、灰色砂質土、遺物は土師器が微量出土した。

S P102 調査区の西辺中央で検出した円形のピットである。東側の一部が溝 S D101で切られているが、直径約30cm、深さ約5cmである。断面は皿状で、埋土は暗茶灰色砂質土で、遺物は出土しなかった。

S P103 調査区の北東隅で検出した円形のピットである。直径約20cm、深さ約15cmである。断面は深い椀状で、埋土は黄橙色粘質土混じり淡褐灰色土、遺物は出土しなかった。

第2 遺構面 鎌倉時代・古墳時代後期・弥生時代後期の溝1条・土坑1基・旧河道2条・落ち込み1基・ピット5基を検出した。

S D201 調査区の南半で検出した東西方向の溝である。溝の西端は調査区外に続き、東端は落ち込み S X201で切られているため全長は不明であるが、長さ3.8m以上、幅0.9~1.3mである。深さ約35cmで、断面は浅い皿状であるが、西壁付近では南寄の底がさらに一段深くなっている。埋土は上から順に淡褐灰色土、淡黄色微砂と淡褐色砂の混和したもの、淡褐灰色土で、遺物は弥生土器が微量出土した。

S K201 調査区の中央西寄で検出した椭円形の土坑である。北側の一部が井戸 S E101で破壊されているが、長径2.1m、短径1.5mである。断面は浅い椀状であるが底部には幅10~20cmの分岐した小溝が数条あって起伏に富み、中央部での深さは約40cmである。埋土は場所や底部の小溝部分によって少し異なるが、茶灰色系の粘質土である。形状から樹株を掘り起こした土坑で、小溝は根の深い部分であると考えられる。遺物は弥生土器が出土した他、結晶片岩が1点出土した。

S R201 調査区の北西隅で検出した旧河道である。調査区外に続くため長さは不明であるが、現状で3.7m以上、幅1.7m以上である。底部には起伏があり、深さは60~70cmである。埋土は場所によってかなり差異があるが、上部から中部が茶灰色系の粘質土～砂礫、下部が灰色系の粘質土～砂である。遺物は弥生土器が少量出土した。平成15年度の街区部分の調査でも弥生時代の旧河道を検出しており、3-1次調査で検出した旧河道同様、南側延長部分の可能性がある。

S R202 調査区の東辺で検出した旧河道である。西側の極めて一部の肩を検出したのみで正確な規模は不明であるが、現状で3.3m以上、幅0.3m以上である。深さは40cm以上で、埋土は淡灰褐色粗砂である。遺物は須恵器・丹波焼が出土したため、鎌倉時代頃の旧河道であると考えられる。

**S X201** 調査区の東辺で検出した落ち込みである。東側が旧河道 S R 201で、南側が攪乱で破壊されているため全体の規模は不明であるが、現状で南北長3.8m以上、東西幅2.0m以上である。底部には場所により起伏があるが、深さは最深部で深さ約50cmである。埋土は上から順に淡灰茶色土、淡灰茶色土粘質土、淡褐灰色粘質土で、遺物は弥生土器・須恵器が出土した。

**S P201** 調査区の中央北寄で検出した方形のピットである。一辺約20cm、深さ約10cmである。断面は逆台形で、埋土は淡茶褐色砂質土、遺物は出土しなかった。

**S P202** 調査区の東半北寄で検出した一ヶ所が尖った楕円形のピットである。長径約30cm、短径約20cm、深さ約5cmである。断面は浅い皿状で、埋土は淡灰色土、遺物は弥生土器が微量出土した。

**S P203** 調査区の東半北寄で検出した楕円形のピットである。長径約20cm、短径約15cm、深さ約5cmである。断面は浅い皿状で、埋土は淡灰茶色砂質土、遺物は出土しなかった。

**S P204** 調査区の東半北寄で検出した楕円形のピットである。南東側の一部が土坑 S K 101で破壊されているが、長径約30cm、短径約20cm、深さ約5cmである。断面は浅い皿状で、埋土は淡黄茶色砂質土、遺物は出土しなかった。

**S P205** 調査区の東半北寄で検出した隅丸三角形のピットである。長さ約40cm、幅約20cm、深さ約15cmである。断面は「V」字形で、埋土は白黄色土混じり淡褐灰色砂質土、遺物は山土しなかった。

**小結** 今回の発掘調査では室町時代頃の遺構面と、鎌倉時代・古墳時代後期・弥生時代後期が同一面化した遺構面の二面を確認した。遺構もかなり密な状態で検出したが、北側ほど遺構面までの深度が浅いため、周辺一帯では後世の削平をかなり受けている場所も多いものと推定できる。

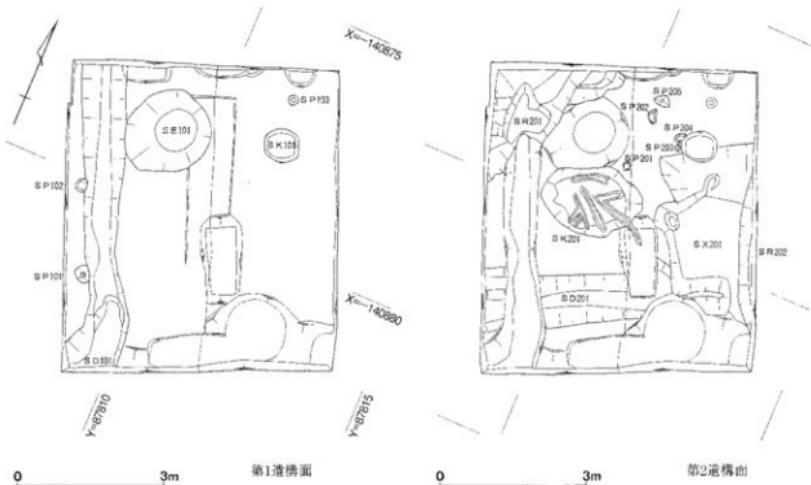


fig.29 第3-3次 調査区平面図



fig.30 第3・3次  
調査区全景

3. まとめ 森南町遺跡はこれまでの調査によって弥生時代後期・室町時代の二つの遺構面を持つ遺跡であることが解明されている。今回の調査地点は第1・2次調査が実施された街路部分の南隣街区南辺で、調査前には二つの遺構面が続いていることが予想されていた。調査の結果、後世の耕作等で削平されて同一面化した調査地点もあったものの、第1・2次調査同様に室町時代頃と弥生時代後期の二つの遺構面が確認された。

第1遺構面で検出した遺構からは遺物がほとんど出土しなかったため、上層もしくは下層の旧耕作土から出土した遺物等から室町時代と推定されるものではあったが、井戸とビットが検出された。さらに上層から掘り込まれていた可能性もあるが、江戸時代頃の土坑と溝も検出された。従って調査地点の周辺には当該時期の遺構がさらに存在するものと考えられる。

第2遺構面は弥生時代後期の遺構面と考えられていたが、他に鎌倉時代と古墳時代後期の遺構も検出された。第1・2次調査では南方は当時の湿地もしくは耕作地が広がっていると考えられていたが、調査の結果掘立柱建物や竪穴住居といった居住に伴う遺構は検出されなかったものの比較的密に遺構が検出されたため、湿地もしくは耕作地はもう少し南方になることが確認された。

現在の国道2号線付近には縄文海進で形成された海蝕崖が埋没していると想定されているが、縄文海進の時期以降では2号線以南は確實に湿地もしくは耕作地であったことが阪神淡路大震災での建造物の被害の分布状況や周辺での埋蔵文化財の発掘調査成果から明らかである。森南町周辺ではまだ当時の耕作地が確認されたことはなく、また今回の発掘調査でも良好な遺構が検出されたのではないが、少なくとももう少し南のほうへ遺跡が広がる可能性は考慮しておく必要があろう。

## 4. 本山北遺跡 第3次調査

### 1. はじめに

本山北遺跡は、六甲山系南麓の扇状地扇端部付近に立地する遺跡である。遺跡の所在する一帯は阪急岡本駅前でもあることから市街地化が早くから進行していたが、平成3年度に駅前至近地のテナントビル新築に伴う試掘調査で始めて遺跡の存在が判明した。遺跡は発見の契機となった事例も含めて過去2回発掘調査が実施され、これまでに古墳時代前期の堅穴住居群と鎌倉時代の木棺墓が確認されている。しかし既に市街地化がかなり進行しているため、発掘調査の機会が得られないまま遺跡が消滅してしまった場所も相当多いと考えられ、まだ詳細な状況が判明していない遺跡もある。



fig.31  
調査位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

#### 基本層序

今回の調査は、地下の文化財に影響を与える擁壁部分についてのみ発掘調査を実施した。

詳細な層序は、上から順に現代の盛土、宅地化直前の耕作土が2層、床土、遺物包含層、地山と続く。遺構は地山の上面で検出した。

#### 検出遺構

遺構は堅穴住居2棟、溝1条、土坑1基を検出した。

#### S B01

調査区北辺で検出した方形の堅穴住居である。住居南辺を幅0.4～0.7m検出したのみで大半が調査区外に続くため規模は不明であるが、現状で一辺5.7m以上である。深さは15～20cmであるが、調査区東端では床面が少し上方に傾斜しているため住居の隅が近いと考えられる。周壁溝は検出されなかったが、調査区北辺中央で幅1.0m、床面からの深さ30cmの貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。土坑の北半は調査区外に続いている。埋土は住居本体が暗茶褐色疊混じり粘質土、土坑が上から順に暗茶色疊混じり粘質土、茶色粘質土である。遺物は古墳時代初頭の土師器が多く出土した。

#### S B02

調査区南東で検出した方形の堅穴住居である。住居北西部分を検出したのみで大半が調査区外に続くため規模は不明であるが、現状で一辺4.5m以上である。深さは約35cmであるが、西側には中央部より5～10cm高い屋内高床部がある。周壁溝はこの高床部から北側

の壁下を巡る状態で検出され、幅は約0.3mである。埋土は住居本体が上から順に暗茶灰色疊混じり粘質土、暗茶灰色疊・炭混じり粘質土、周壁溝が暗茶灰色炭混じり粘質土である。遺物は古墳時代初頭の土師器が多く出土したが、高床部からの出土量は少なかった。

**S D01** 調査区西側で検出した溝である。堅穴住居S B01とS B02に切られる状態で検出されたためわずかしか遺存していなかった。現状で長さ1.2m、幅0.9mである。断面は椀状で、深さは約20cmである。埋土は茶灰色粘質土で、古墳時代初頭の土師器が出土した。

**S K01** 調査区の西端で検出した不整形な土坑である。西端が調査区外に統くため全体の規模は不明であるが、現状で長さ1.3mである。断面は深い椀状で、深さは約40cmである。埋土は暗灰茶色粘質土で、古墳時代初頭の土師器が少量出土した。

**3. まとめ** 狹い面積の発掘調査ではあったが古墳時代初頭の堅穴住居が2棟検出され、他に溝と土坑も検出された。本山北遺跡の過去の発掘調査でも同じ時期の堅穴住居が検出されているが、今回も堅穴住居が検出されたため、調査地点一帯はやはり集落の中心部分であると考えられる。現状では遺跡の南端は今回の調査地点の南隣の道路までとなっているが、さらに南側に拡がることが考えられる。また周辺の地形を観察しても現状の遺跡範囲の東西両端を超えて微高地が続いていくことから、遺跡の東西両端も南端同様に拡大する可能性が高い。市街地化が早くに進行していた場所での調査ではあるが、調査事例を積み重ねることによって遺跡の実態を解明し、また境界を確定していく作業が必要であろう。その意味からも今回の調査成果は大きいものと言えよう。

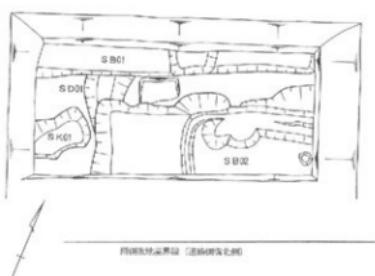


fig.32 調査区平面図



fig.33 調査区全景

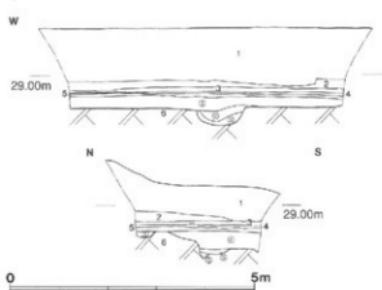


fig.34 調査区断面図

1. 近現代盛土
2. 灰色粘質土（宅地化前耕作土）
3. 淡灰色粘質土（宅地化直前耕作土）
4. 灰褐色粘質土（耕土）
5. 茶灰色砂質土（遺物包含層）
6. 暗茶褐色疊混じり粘質土（住居）
- ① 暗茶褐色疊混じり粘質土（SB01）
- ② 暗茶色疊混じり粘質土（SB01土塙）
- ③ 茶色粘質土（SB01土塙）
- ④ 暗茶灰色疊混じり粘質土（SB02）
- ⑤ 茶色粘質土（SB02）
- ⑥ 暗茶灰色疊混じり粘質土（SB02馬塙溝）

## 1. はじめに

扁保曾（ヘボソ）塚古墳は、六甲山系南麓の扇状地扇端部付近に立地する古墳である。古墳は主軸が西北西方向の全長60m以上、後円部径30m以上の前方後円墳で、主体部は割石積の堅穴式石槨である。現在、三角縁神獸鏡を含む青銅鏡6面・石劍2個・勾玉2個・車玉1個・管玉13個・小玉121個・土器片1点が東京国立博物館に収蔵されている。

墳丘には葺石が施されていたようであるが、埴輪は樹立されていなかったようである。これらの内容から古墳が築造された時期は前期の早い段階と考えられている。墳丘は、古墳の北側から見るとすっかり削平されているようであるが、後円部南側の痕跡として古墳の南側には現在も高さ約3.5mの敷地の段差が残っている。

平成6年度に今回の対象地の南側20mで民間の調査団が発掘調査を実施しており、古墳時代中期の掘立柱建物群と弥生時代中期の土器棺が検出されている。また、平成7年度には古墳の北側くびれ部付近で個人住宅の新築計画が立てられ、事前に試掘調査を実施した結果、墳丘盛土と葺石が確認されている。



fig.35  
調査位置図  
1:2,500

## 2. 調査の概要

発掘調査はまだ幾分は盛土が少ない敷地の南辺に東西長約10m、南北幅約2mの調査区を設定した。なお遺構等の掘削は基本的に工事掘削深度までの調査にとどめた。

### 基本層序

上から順に現代の盛土、宅地化直前の耕作土、洪水堆積土上に施された床土、洪水堆積土が2層、旧耕作土、旧床土が2層、遺構面基盤層と続く。遺構面は、暗茶灰色疊混じり砂質土の上面であるが、平成6年度の南側至近地での調査ではもう1層下の暗灰黄色砂質土上を遺構面としていたようである。

### 検出遺構

遺構は溝1条・土坑2基・ピット2基を検出したが、SD01の一部分を除いて掘削していない。また1層下の暗灰黄色砂質土上で自然流路と考えられる集石部分を2条検出した。

### SD01

調査区東端で検出した溝である。西側の肩部を検出したのみで大半が調査区外に続くため長さと幅は不明である。南壁沿いの部分のみを掘削した結果、底部も調査区を越えて東方へ緩やかに傾斜していくために深さは不明であるが、現状では約40cmである。埋土は上

から順に茶灰色砂質土、暗茶灰色粘質土で、中から4世紀後半頃と考えられる土師器が大量に出土した。須恵器は全く出土しなかった。

**S K01** 調査区の西寄で検出した、やいびつな円形の土坑である。直徑60~70cmで、検出した部分の埋土は灰色土である。

**S K02** 調査区の中央西寄で検出した楕円形の土坑である。長径90cm、短径40cmで、検出した部分の埋土は灰色土である。

**S P01** 調査区の南西隅で検出した円形のピットである。直径20cmで、検出した部分の埋土は淡灰色砂質土である。

**S P02** 調査区の東寄で検出した円形のピットで、溝SD01が埋まつた上から掘り込まれている。直径20cmで、検出した部分の埋土は淡灰黄色粘質土である。

**自然流路** 調査区の西寄りと中央で検出した集石部分である。掘削土置き場の関係上から調査区が限定されたため、同一の流路が分岐しているかどうかは不明である。平成6年度の南側至近地での調査でも自然流路が数条検出されている。これらも底まで掘削したわけではないが、調査区中央で検出した自然流路からは弥生土器が1点出土した。

**3. まとめ** 調査区の面積に制約はあるが、調査区の東端で古墳時代前期の溝を検出し、中から土師器が大量に出土した。しかも溝は、調査区を越えて東方の前方部壇丘推定部分へ緩やかな傾斜で続いている。扁保曾塚古墳は、古墳時代前期の早い頃の時期が想定されているが、今回出土した土師器は4世紀後半頃と考えられるものである。土器は溝の底から出土したのではなく、埋土全体に含まれている状態であった。従って溝が埋るまでの時間幅を考えると、溝が掘削されて機能していた時期は古墳が構築された時期と一致する可能性がある。この溝が古墳の周濠になるかどうかは古墳の前方部端の位置を確定する必要があるが、その可能性を十分に考慮しておく必要があろう。

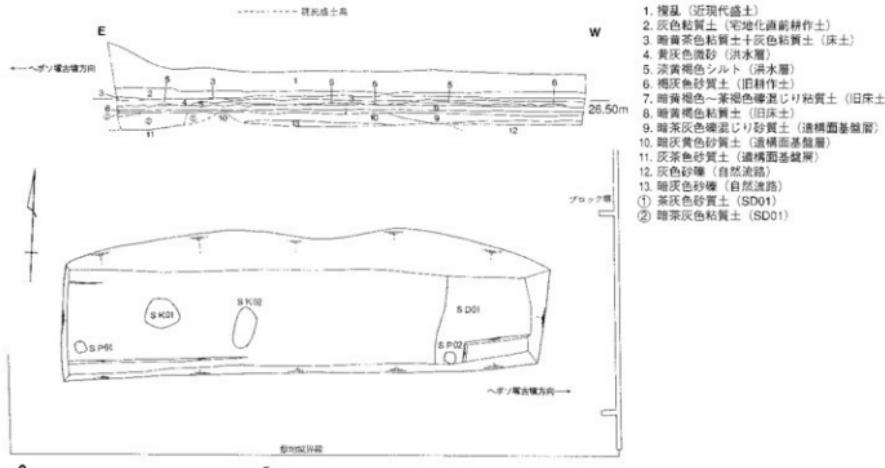


fig.36 調査区平面図・断面図

## 1. はじめに

住吉宮町遺跡は、住吉川等により形成された扇状地端部に位置している。遺跡の時期は、弥生時代中期から近世まで幅広く確認されている。とくに古墳時代後期の埋没した古墳群と集落や、奈良時代の集落等が注目される。

調査地は、遺跡の南半中央部に位置しているが、この付近はあまり調査が実施されていない場所である。そのため、住吉宮町遺跡のなかにありながら周囲の状況は漠然としている。



## 2. 調査の概要

### 基本層序

今回の調査は、遺跡の破壊される GL -2.0mまでの調査を実施している。  
基本層序は、表土、旧表土、黄褐色細砂～中砂（洪水砂）、淡灰色細砂～中砂（洪水砂）、灰褐色細砂～中砂（洪水砂）、灰色細砂～中砂（土壤化層）、淡黒灰色砂質土（古墳時代後期遺物包含層）、暗黄灰色砂質土（洪水砂、上面が遺構面となる）、淡灰褐色細砂～中砂（洪水砂）、黒灰色砂質土（土壤化層、無遺物）、暗黄褐色細砂～中砂（洪水砂）と続く。

さらに下層については、遺構と遺物が存在する可能性はあるものの、工事の影響深度（GL -2.0m）の関係から調査を実施していない。

### 検出遺構

遺構は暗黄褐色砂質土遺構面から、古墳時代後期の竪穴住居の他、掘立柱建物を伴う柱穴と杭痕を多数確認している。遺物は淡黒灰色砂質土遺物包含層と遺構内から、古墳時代後期（6世紀頃）の須恵器と土師器が出上している。

#### S B01

調査区の西端で検出した、方形の竪穴住居である。東西約1.1m以上×南北約3.0m以上で、深さ約20cmを測る。掘立柱建物のS B02とS B03に削平されており、それより古い事実が判る。ただし、遺物から時期差は確認されていない。

このS B02とS B03以外の柱穴は2ヵ所で確認されているが、これについても竪穴住居（S B01）に伴うかどうか、判断はできていない。周壁溝も確認できなかった。

竪穴住居の埋土から、古墳時代後期（6世紀頃）の須恵器と土師器が細片で出土している。

#### S B02

東西方向に3間並ぶ柱列が確認されており、掘立柱建物だと考える。南北方向の並びは確認できず、調査区外の北側へ続くのであろう。

建物方位は座標北から、東へ約70°振っている。柱穴は径約30~40cmで、深さ約10~36

cmを測る。S P04には柱痕が残っており、径約22cmを測る。柱間は約1.3~1.5mである。遺物は古墳時代後期の須恵器と土師器が細片で出土している。

**S B03** 東西方向に2間並ぶ柱列が確認されており、掘立柱建物だと考える。南北方向の並びは確認できず、調査区外の北側へ続くのであろう。このS B03はS B02に削平されており、より古い事実が判る。ただし、遺物からS B02とS B03に時期差は確認できていない。また、S B02とS B03はほぼ重複して建っており、建替えの可能性が高い。

建物方位は座標北から、東へ約74°振っている。柱穴は径約34~52cmで、深さ約34~40cmを測る。S P01には柱痕跡が残っており、径約24cmを測る。柱間は約1.5mである。

遺物は古墳時代後期の須恵器と土師器が細片で出土している。

**杭痕** 調査区の全面から確認されている。特に杭痕1では杭自体が遺存しており、遺構面から深さ約60cmまで、打ち込まれていた。

古墳時代後期の遺構面で検出され、埋上も柱穴と同一ではあるが、杭という遺構の性格上、どの時代の面から打ち込まれているか不確定である。そのため、古墳時代後期の遺構である可能性はもちろん存在するものの、現段階において時期の判断は控えておきたい。

**3. ま と め** 今回の調査は狭い範囲での調査であったが、堅穴住居1棟と掘立柱建物の建替で2棟が確認されている。ただし、今回掘立柱建物とした遺構については、東西方向の柱列の並びを検出しただけであり、南北方向の並びは確認されておらず、柵列である可能性は残る。

調査地付近は、近隣での調査が未だ少ない地域であり、遺跡内での周囲の状況は不明な部分が多くかった。しかし今回の調査成果をみると全体に遺構の密度は濃く、集落の主体となる部分を調査した可能性が高い。本調査の北東に位置する第25次調査地においても古墳時代後期の掘立柱建物が確認されており、周間に同時期の集落が広がっている状況が想定できよう。

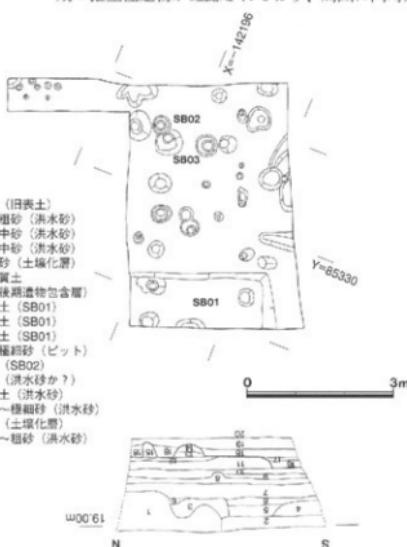


fig.39 調査区全景

fig.38 調査区平面図・断面図

## 7. 郡家遺跡 第77次調査

### 1. はじめに

郡家遺跡は、東灘区御影町郡家、御影、御影中町を中心として東西約800m、南北約500mの範囲に広がる。弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。この遺跡は、天神川によって形成された扇状地上に立地している。これまでに70回以上の調査が実施されてきており、以前から摂津国先原郡衙の推定地の一つと考えられている。

今回の調査は、城ノ前地区に位置する。城ノ前地区においてはこれまでに約40回の調査を実施しており、今回の調査地の隣接地における調査でも、弥生時代後期の集石墓や古墳時代後期の埋道をもつ堅穴住居などの遺構や、水晶製と考えられる算盤玉などの遺物が検出されており、弥生時代後期や古墳時代後期の集落構造を示す重要な成果が得られている。



### 2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので工事によって埋蔵文化財が影響を受ける部分の約40m<sup>2</sup>について実施した。

#### 検出遺構

調査の結果、現地表（調査区の北側を基準）下約1.7～1.9mで、淡茶灰色細砂あるいは（暗）褐色砂質土を基盤層とする遺構面を主に調査区西半部で確認し、ピット、土坑、溝などの遺構を検出した。

この遺構面検出レベルは、ほぼ工事影響深度であるため遺構の掘削は行わず遺構の平面プラン検出に止めた。遺構の時期は、遺物包含層及び遺構検出中に出土した遺物から古墳時代後期（6世紀後半頃）と考えられるが、詳細については整理作業の進展を待って検討を加えたい。

調査区東半部については、工事影響深度においてはほぼ全面が遺物包含層あるいは遺構埋上と考えられる土層が広がっている。この部分が堅穴住居などの遺構にあたっているの

か、あるいは遺物包含層の途中段階のものであるのかは掘削を行っていないため断定できない。

また、前述のように調査区南端部の幅80cmについては工事影響深度が遺構面検出レベルよりも深いため、南西隅、南端中央、南東隅の3ヶ所で断ち割りを行った。その結果、この範囲については、現存する擁壁及びその背面の搅乱部分にあたっており、既に埋蔵文化財が失われていたことが判明したため、全体の掘削は行わなかった。

**3. まとめ** 今回の調査は、工事影響範囲及び深度までに止めたため、遺構の掘削は実施しなかったが、古墳時代後期と考えられる遺構面を確認した。

このことは、隣接地での既往の調査成果とも合致するもので、当該期の集落域が当調査地にも広がっていることが明かとなった。

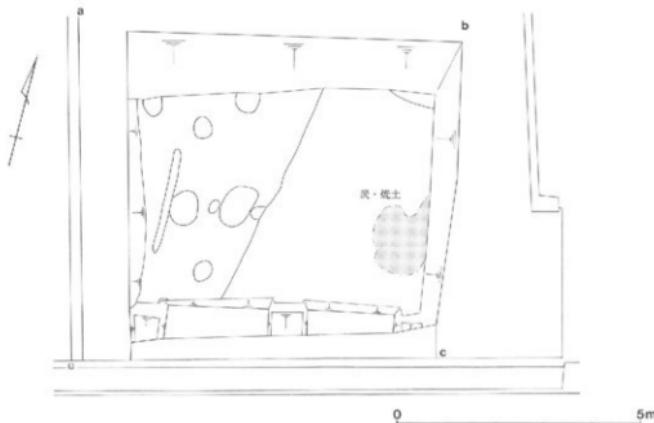


fig.41 調査区平面図

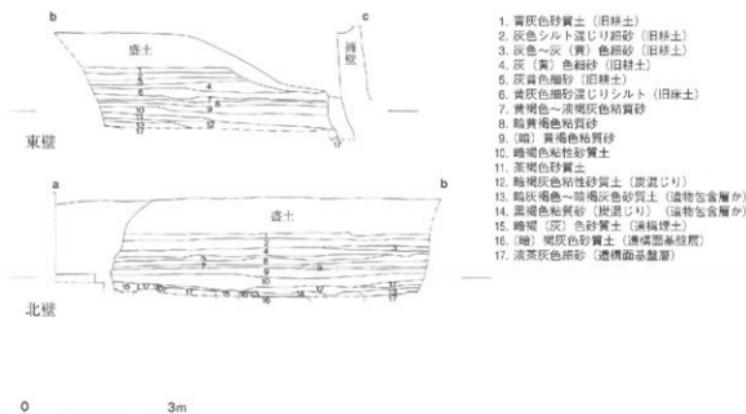


fig.42 調査区断面図

## 8. 日暮遺跡 第22次調査

### 1. はじめに

日暮遺跡は、六甲山南麓の沖積地末端、生田川左岸に位置する。昭和61年に遺跡の存在が確認されてから、これまで21次におよぶ調査から古墳時代の堅穴住居、平安時代の掘立柱建物等の遺構が多数検出されている。



fig.43  
調査地位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

#### 基本層序

今回の調査は、共同住宅建設に伴う発掘調査である。残土置き場確保のため、調査区を2回にわけて調査を実施している。

上層より、淡灰色砂質土（旧耕土）、茶褐色砂質土（マンガンを含む）、黒褐色砂質土（遺構面）である。調査区の東半は、黒褐色砂質土の上面に灰褐色砂質土層が確認される。

遺構は、溝1条、柱穴約50基を検出した。北から南への傾斜とともに、西から東へ傾斜しているため、西側の遺構の残存状況は悪かった。

#### S D01

調査区の南端に東西方向の溝を検出した。深さ0.2m、幅は調査区外へ広がるもの約0.8mと推測される。奈良時代の遺物が出土している。調査区の南40mには、溝と並行して西国街道が通っていたことから、道路に伴う側溝の可能性も考えられる。

#### 柱穴

50基程度を検出した。直径20~50cm、深さ10~40cmと、かなりばらつきがみられる。また埋土は、灰褐色系と暗灰色系のものが確認できた。

遺物がほとんど出土していないために時期は不明であるが、S D01を切っているものと切られているものがあるため、柱穴の時期は少なくとも2時期あると考えられる。

### 3. まとめ

今回の調査は、面積がさほど広くないため、調査区内で完結する建物を検出することはできなかったが、柱穴を多数検出した。

また、調査区に並行して東西方向の溝S D01を検出した。調査の段階で、時期の判明した遺構はS D01のみであるが、他の遺構の時期については、遺物の整理が進んだ段階で改めて言及したい。



fig.44  
調査区全景

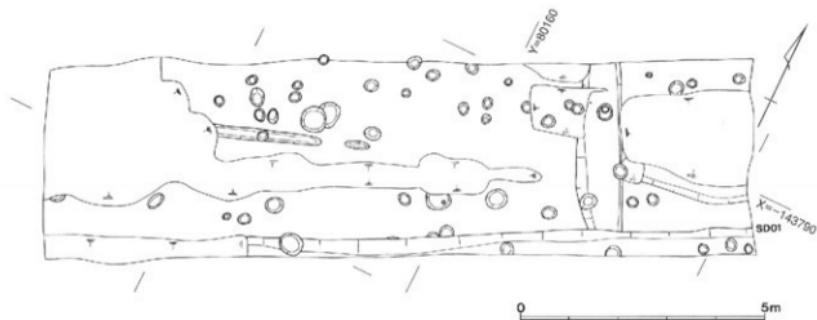
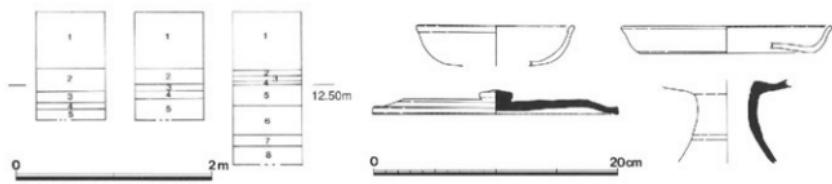


fig.45 調査区平面図



- 1. 盛土・擾乱
- 2. 淡灰色砂質土(田耕土)
- 3. 茶褐色砂質土(マンガンを含む)
- 4. 灰褐色砂質土
- 5. 黒褐色砂質土(遺構面)
- 6. 黒色砂質土
- 7. 暗褐色砂質土
- 8. 黄褐色石混じり砂質土

fig.47 S D01出土遺物実測図

fig.46 調査区南壁断面模式図

## 9. 神戸臨港鉄道南本町架道橋台跡 第1次調査

### 1. はじめに

神戸臨港鉄道は明治40年の竣工以後、近代神戸港の建設と発展に寄与し、また国際都市神戸への発展の原動力となった鉄道である。後に国鉄に売却されて臨港線として使用されていたが、平成15年11月、98年間にわたる海陸連絡輸送の使命を終え廃線となった。その軌道敷内は稼動中の補強・改修が何度も繰り返され、築造当初の明治時代末期の遺構は築堤内に埋没していた。そして現在は区画整理事業などの用地再活用によって旧神戸港駅及びその他の一部は撤去が進みつつある。



fig.48  
調査位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

平成16年4月、日本貨物鉄道株式会社から更地化を進めている神戸臨港線の敷地内から煉瓦造りの橋台が出土したとの連絡があり、協議の結果、平成16年5月より南本町架道橋4基の確認調査を実施した。また第1・2架道橋台（以下、橋台）については現状保存が不可能と判断されたため、平成17年1月より発掘調査を実施することとなった。

#### 確認調査

調査の結果、神戸臨港鉄道建設当初（明治36年着工、明治40年竣工）の煉瓦造りの重力式架道橋で、当時の石敷きの道路（第4架道橋）やその側溝が良好に遺存していることが明らかとなった。また橋台に使用された煉瓦の刻印からも明治40年までに築造されたものであることが裏付けられた。

検出された4基の橋台は、鉄道を交差する道路の両脇に煉瓦で組み上げた橋台で、2基1対で橋梁を架けた重力式の架道橋であることが明らかとなった。架道橋に架かる橋桁は既に失われていたが、これに伴う道路も検出され、石組み溝やモルタル造の側溝が検出されたが、第2橋台では側溝は検出されなかった。

#### 転体の構造

架道橋台の転体全体の形状は、『コ』の字状に煉瓦を組み上げている。道路に面する両

端には、長方形に加工した花崗岩切石を交互に積み上げた隅石がある。

煉瓦はイギリス積みで、端部に煉瓦を半裁した羊羹を使用する部分（側面）と煉瓦の小口面を使用する部分（道路側・正面）がある。また、道路に面する煉瓦には、光沢のある赤褐色の焼過煉瓦が使用されている。築堤内に収まる背面や基礎部分には、比較的低温で焼かれた赤橙色の煉瓦が使用されている。

橋台の規模は、第2・4橋台が幅6.75mとほぼ同一規格であるが、第1橋台は、7.2mである。

橋台高は最も東に位置する第1架道橋が5.6m（道路面からの高さ）最も高く、神戸港駅に近づく（西方）ほど低くなっている。（第2架道橋高：4.9m・第4架道橋高：3.6m）

**橋桁受部** 主桁を受ける橋桁受部には、主桁の載る桁座部分に花崗岩の切石（床石）がはめ込まれている。築造当初の桁座部が残る第4架道橋では4個の花崗岩切石の床石が存在する。床石は左右一対で一組となり、その間隔から幅1.7mの橋桁が2基架かっていたことが窺える。

**橋台天場** 第1橋台は、東方（灘駅方面）に向かい北東に軌道を向ける変換地点で、列車が緩やかにカーブする地点であるため、橋台の天場の煉瓦を斜方向に積み上げ、主桁との接合部にかかる列車の荷重を分散させる工夫が見られる。

**隅石** 橋台の両端には、対物による衝撃からの保護と強化、および構造物としての外観を引き締める役割を果たす隅石がある。隅石は、長方形の花崗岩切石を交互に組み合わせたもので、隅石と隅石との間に煉瓦が5段挟まる。

第2から第4橋台は隅石端部の角度が直角に仕上げられる（本角）が、第1橋台では南側の隅石は鋭角（鈍角）に、北側の隅石は鈍角に仕上げられ（菱角）、これに沿って煉瓦も積み上げられている。

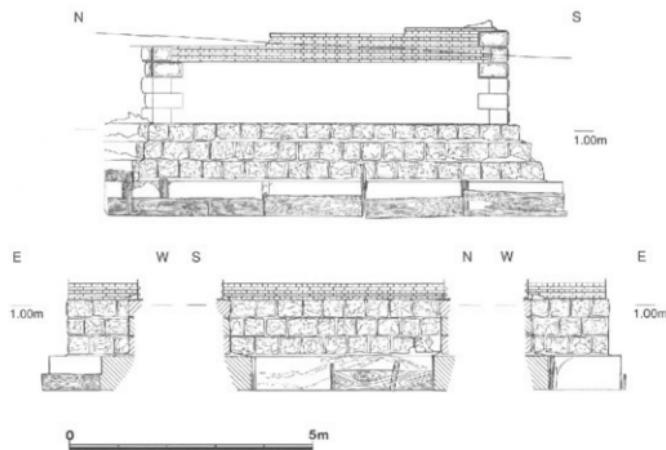


fig.49  
第1橋台（東）  
立面図

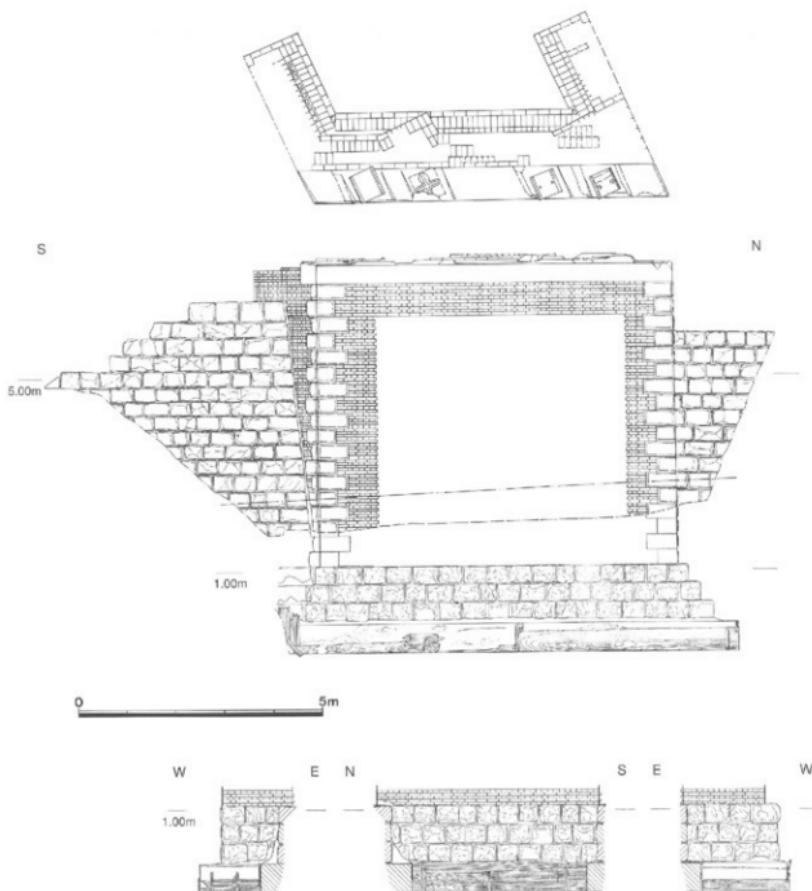


fig.50 第1橋台(西) 平面図・立面図

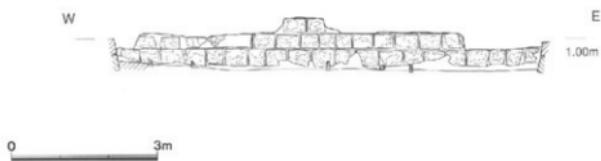


fig.51 第1橋台南側石垣 立面図

### 使用煉瓦

煉瓦の規格は、若干の誤差はあるものの概ね長辺約22cm、短辺10.5cm、高さ5.5cmで、『◇』や『×』の刻印があり、前者は貝塚煉瓦株式会社のもので、同社は、明治40年に大阪窯業株式会社に合併している。このことからこの煉瓦を使用して橋台は、明治40年以前の築造であることが窺える。

### 基礎部の構造

軸体の荷重を地盤に伝達し支える基礎部の構造は、地盤上に直に軸体を載せる直接基礎か、杭によって支える杭基礎なのかは、安全上の問題で明らかにすることはできなかったが、第1橋台の下部構造について確認した。

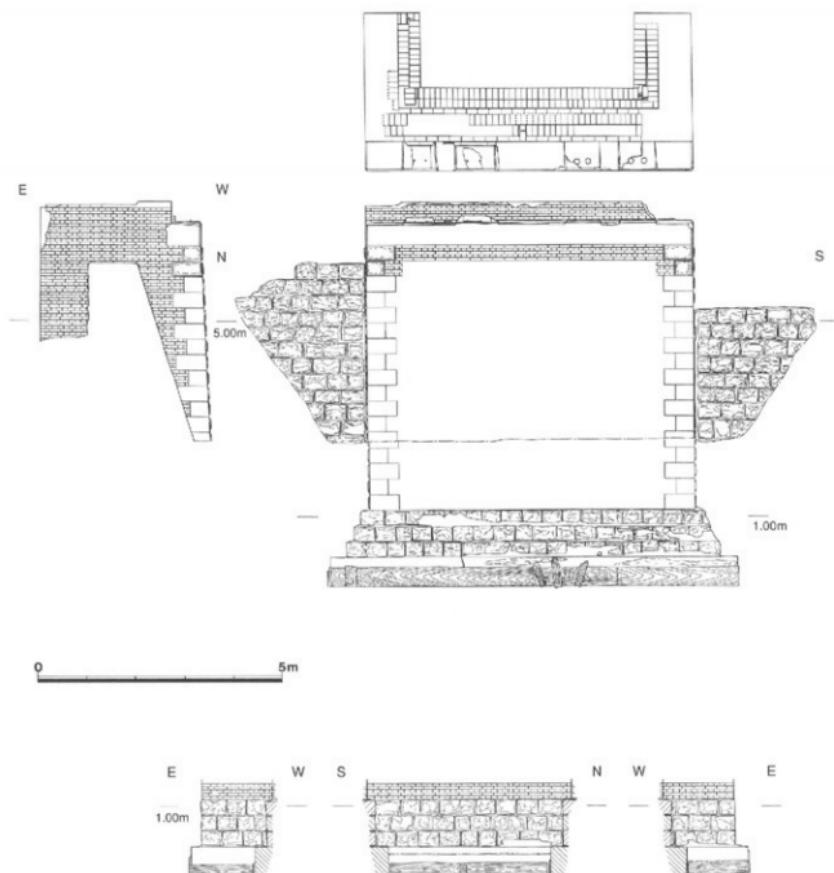


fig.52 第2橋台（東） 平面図・立面図

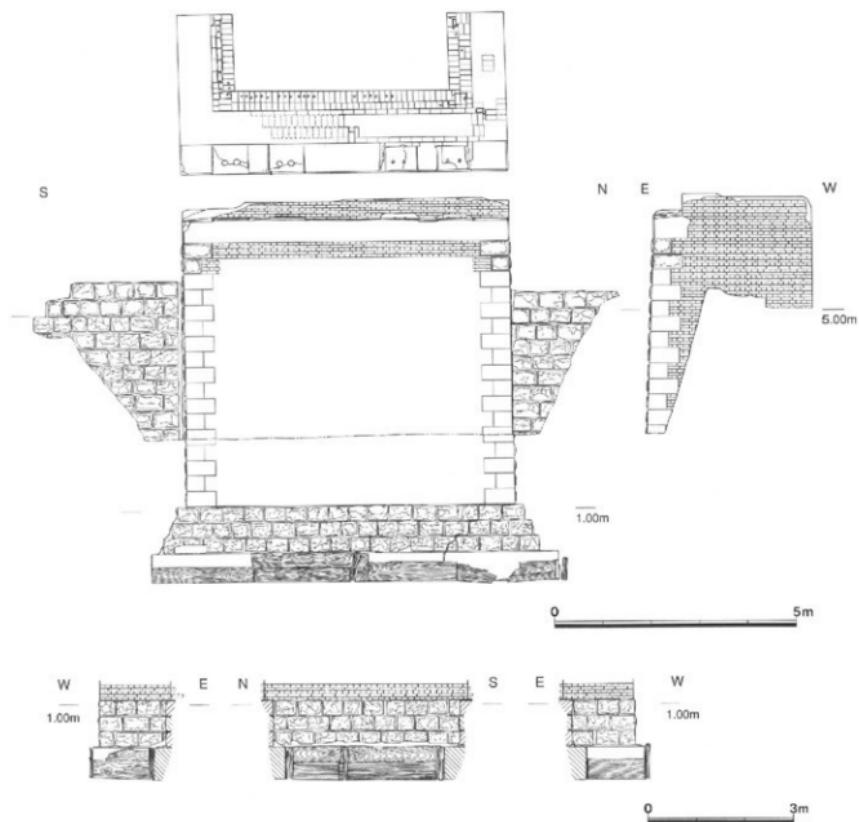


fig.53 第2橋台（西） 平面図・立面図

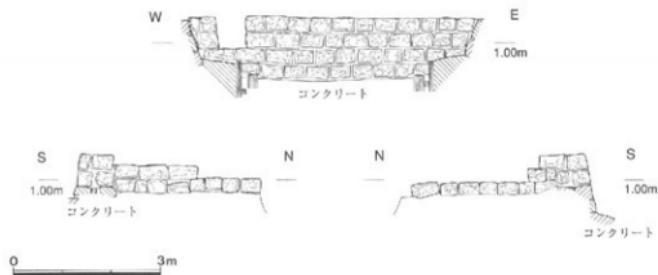


fig.54 第2橋台南側石垣 立面図

第1橋台の基礎下部構造は、花崗岩の切石を2段に布積みに組み上げており、その上に煉瓦を積み上げている。花崗岩切石の底面は、標高0.5~1mで、砂地に接しており、湧水が激しい。

築堤部の構造 灌駅から神戸港駅間の大半は、盛土による堤を築き高架化している。この築堤が最も良好に遺存しているのは第4架道橋の部分で、橋台の北側に沿って花崗岩の切石を布積みした翼壁（ウイング・袖壁）が築かれ、築堤盛土の土留めを行っている。

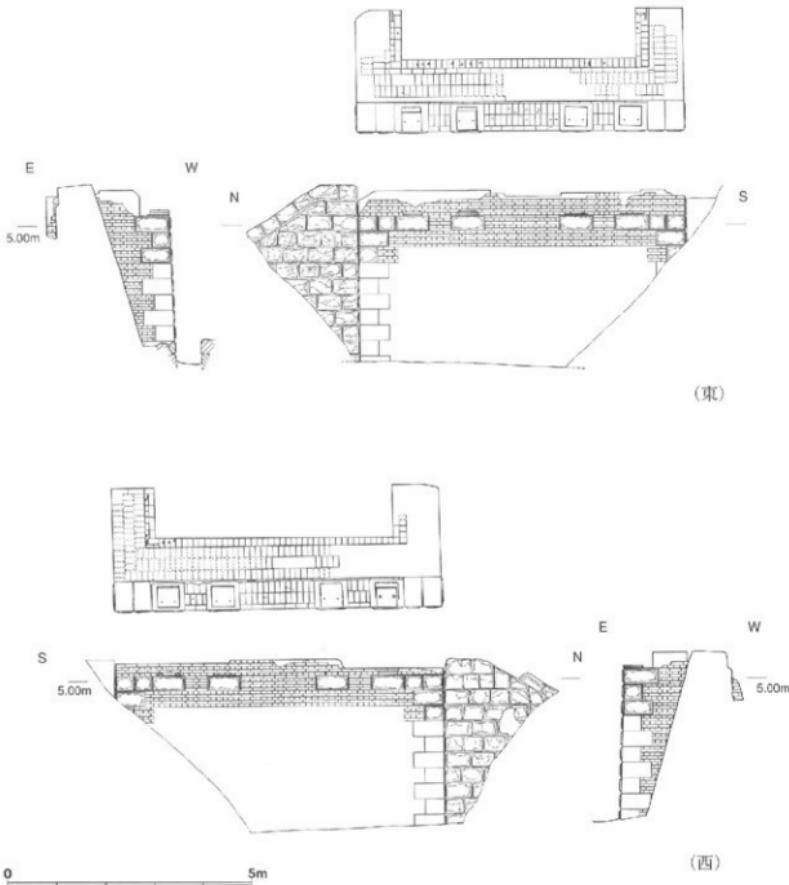


fig.55 第4橋台 平面図・立面図

築堤盛土は、砂層をベースに、上部をよく締めた粘土で覆われている。今回の調査では、北半部について確認したが翼壁の形態と築堤盛土の構築土の堆積状況から台形状の築堤であったことが窺える。

#### 道路

架道橋に伴う道路は、第1～第3架道橋では、アスファルト舗装であり、部分的にモルタルによる補修が認められた。

第4架道橋での道路は、長辺約60cm、短辺約30cmの長方形の花崗岩切石を敷き詰めた右敷きの道路で、後世の埋設管敷設に伴い部分的に石を取り除かれた部分があり、アスファルトやモルタルで補修が行われている。

#### 道路側溝

第1架道橋では、コンクリート製、第3架道橋では、石組み石張りの溝、第4架道橋は、石組みで溝底はモルタル張りの溝であった。

第2橋台には、道路側溝がなかったが、これは架道橋が完成後、道路が敷設されなかつたためであると考えられる。

#### 本調査

南本町（臨浜）第1・2橋台については、解体撤去に先立って下部基礎構造を解明するために1月より発掘調査を実施することになった。また実際には下部の基礎部分が現存する図面以上に深く構築されていたため、土留め支保工の安全上から第1・2橋台の橋台南北両側面については基礎部分の最下部までの調査は実施できなかった。

#### 第1架道橋台

第1橋台では以下の各項目の内容が明らかとなった。

##### 隅石

本調査によって西側橋台の隅石の段数は18段であることが明らかとなった。しかし主桁を受ける橋桁受部はコンクリート製に改修されているが、本来は第4架道橋がそうであったように主桁の載る桁座部分に花崗岩の切石（床石）がはめ込まれ、その外側に隅石が存在していたと推定できる。従って構築当初の隅石は19段であり、また隅石1段当たり煉瓦が5段積まれているため、桁座部分までは煉瓦が95段であったことになる。

##### 基礎部分

基礎部分はコンクリートを厚く流し込んだ後、花崗岩の間知石を3段積み上げたものある。コンクリートの厚さは東側では約70cm、西側では約60cm、間知石の高さは平均36cmである。間知石とコンクリート、間知石と間知石とはモルタルの目地で接着されており、その厚さを加えると基礎の深さは東側で約1.9m、西側で約1.8mである。構築当時の状況を想定すると、当時の地表面から地面を大きく掘り込んでコンクリートを流し込み、その上に間知石を積み上げたことになる。従って基礎部分の周囲には掘形が本来遺存しているはずである。実際に掘削の際には約10cmの幅でコンクリートの外側に掘形が観察された部分も存在したが、掘形の遺存状況が極めて悪かったこと、解体工事と並行して調査が進められたことから掘り込み面を検出して掘形の深さを確定することはできなかった。

##### コンクリート

コンクリートの周囲には厚さ約2cmの松材と推定される板材が型枠として使用されていた。板材は杭もしくは小さな板材で端や継ぎ目が固定されていたが、杭や小さな板材の中には釘で型枠本体と固定されていたものもあった。また杭や小さな板材は型枠の外側、即ち掘形側で型枠を固定していたもののが多かったが、時には型枠の内側で固定していたものもあった。また西側橋台背面の「凹」の字状の部分には型枠の外側に線刻が2条刻まれていたが、複数の板材にまたがって刻まれていないため製材のときの線刻である可能性が考えられるものの線刻の意味は不明である。

コンクリート本体には骨材の砂利が多い部分や少ない部分があり混じっており、中には砂利が多すぎて固化せずに剥落している部分もあった。コンクリートは現在のようにミキサー車で運ばれたものではなく、当然すぐ近くの場所で練り上げられたものであろう。従ってその際砂利の混合比率が多すぎたためか、手練のために十分に混合していなかったと考えられる。また橋台の前面部分にはコンクリートを流し込んだ際の土圧で、型枠が掘形側に膨れて変形している部分もあった。

#### 間知石

間知石積の下段はコンクリートの端から20~40cm内側に控えて積み上げられている。中段と上段の石積は橋台の前面と両側面は下段から約15cmずつ内側に



fig.56 第1橋台（西）前面根石積



fig.57 第1橋台（西）背面根石積

控えられて、背面は控えずにすく真上に積み上げられている。その際に前面・両側面・背面全ての面で上下の段の目地が通らないようにずらされている。積み上げにはモルタルが使用されているが、橋台の完成後には石積は道路面下に完全に埋没してしまうためかあまり丁寧には施工されておらず、モルタルが間知石の表面にはみ出している部分がかなり多かった。また間知石には矢穴が遺存しているものもあったが、矢穴は全て幅約4cmの小さなものである。第1橋台西側の背面北側面の間知石は上中段各1石ずつ脱落しており、また背面南側面の間知石には縦目地に大きな隙間が生じていた。

**煉瓦積控え幅** 橋台本体の煉瓦は上段の間知石積の上にモルタル目地を塗り、その上から積み上げられている。積み上げ位置は橋台の前面と両側面は間知石端から約15cmずつ内側に控えられているが、背面では場所によって控えの幅はまちまちである。背面の外側は一部控えて積み上げられている場所があるが基本的には控えずにすく真上に積み上げている。背面の「凹」の字状の部分は5~20cmの幅で控えて積み上げられているが、各面の幅は全く揃っていない。これは間知石積と同様の意識が働いたもので、橋台背面は軌道敷の築堤完成後には土中に埋没するため、控えの幅を厳密に揃えるようには意識されなかったと考えられる。

#### 煉瓦積面

確認調査で橋台の煉瓦積は所謂イギリス積であることが判明していたが、通常のイギリス積と異なる点は前面が長手の段は両側面も長手の段、前面が小口の段は両側面も小口の

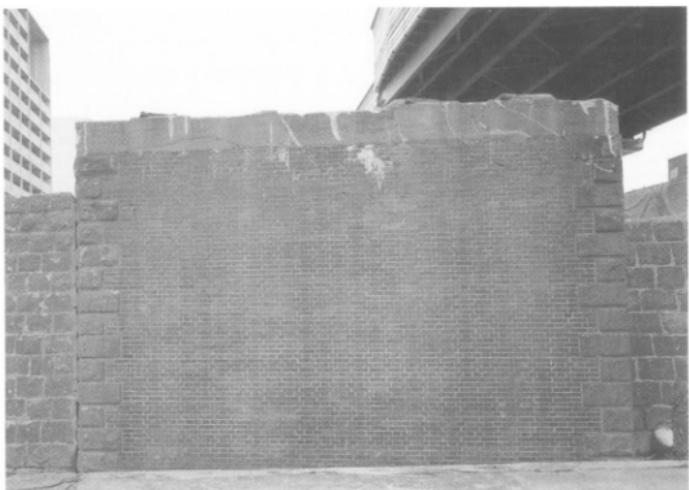


fig.58  
第1橋台全景

段となっている点で、このため橋台の角や隅の部分では小割した煉瓦や七五の煉瓦を嵌め込んで調節し、煉瓦の向きを変えて積んでいる。しかし橋台背面の間知石積との控えの幅が一致していないことと同様に、橋台背面部分の煉瓦は軌道敷の築堤完成後には土中に埋没するためあまり厳密には詰まれていなかったようで、長手の段も小口の段もそれぞれの1段上の長手や小口の段との縦目地の位置がずれているもののが多かった。

**煉瓦積変則部** 西側橋台の背面の「四」の字状の部分で煉瓦積が変則的に張り出している段が1ヶ所確認された。この部分は煉瓦の段数では下から45段目と46段目の部分で、隅石の段数では丁度下から9段目と10段目の境界部分になる。確認調査で煉瓦積は隅石1段分即ち煉瓦5段分を1つの単位として微妙に積み方を調整されて積み上げられていることが判明しているが、この変則部分も積み上げ単位が変わる部分で施工されていたことが明白である。大阪鉄道管理局が昭和33年12月5日に調査した図面では張り出している部分が5ヶ所表現されているが、この図が作成された時点では橋台背後には築堤の盛土が存在していた筈で、張り出し部分の表現は推測であった可能性が高い。東側橋台は上部が損壊しているためこの張り出し部分は不明であるが、第2橋台でも同様に変則部分が確認されており、しかも東西両側でその部分までの段数が一致しているため、東側橋台も西側と同じ位置に変則部分が存在していた可能性が極めて高い。

**第2架道橋台** 第2橋台も基本的には第1橋台の構造と同じであるが、若干異なる部分もある。

**隅石** 第2橋台でも主桁を受ける橋桁受部はコンクリート製に改修されているが、今回の調査で隅石の段数は東西両側橋台とともに17段であることが明らかとなった。従って構築当初の隅石は18段であり、桁座部分までは煉瓦が90段であったことになる。

**基礎部分** 基礎部分のコンクリートの厚さは東西両側ともに約60cm、花崗岩の間知石の高さは平均32cmで、間知石は第1橋台より少し低いものを使用している。モルタルの目地の厚さを加



fig.59  
第2橋台（東）



fig.60  
第2橋台（西）

えると基礎の深さは東西両側ともに約1.6mである。阪神淡路大震災の際に生じたものは不明であるが、東西両橋台の前面にはそれぞれ3段の石積を貫く状態で日地に隙間が生じており、さらにその隙間はその下のコンクリートをも引き裂いていた。また第1橋台同様にコンクリートの外側に掘形が観察された部分も存在したが、掘り込み面を検出して掘形の深さを確定することはできなかった。

コンクリート コンクリート周囲の型枠使用も缺失程度も第1橋台と同様である。東側橋台前面の型枠

外側には意味不明の線刻が5条刻まれていた。コンクリート本体で第1橋台と異なる点としてはコンクリートの剥落部分は存在せず、東側橋台前面ではコンクリート流し込んだ際に型枠が外れていたのか逆に掘形方向にはみ出している部分もあった。しかし型枠が土圧で掘形側に影れて変形している部分はなかった。

**間知石** 間知石積とコンクリート端との位置関係や間知石の積み方は第1橋台と同様である。モルタルのはみ出しや、矢穴の遺存も同様である。

**煉瓦積控え幅** 煉瓦の積み上げ方も第1橋台とほぼ同様である。異なる点は背面の外面は全て控えずにつぐ真上に積み上げている。背面の「凹」の字状の部分は10~20cmの幅で控えて積み上げられており、各面の幅が揃っていないものの第1橋台よりは揃っている。

**煉瓦積面** 煉瓦積各段で各面が長手もしくは小口で揃えられていることも第1橋台と同様であるが、第1橋台は軌道敷と下の道路の角度から橋台の平面形が平行四辺形状になっていることに對し、第2橋台では長方形状である。従って橋台の隅の部分で使用する小割した煉瓦も変則的に三角形にする必要がない。第1橋台ほど隅の部分の処理に苦心はしなかったと思われる。しかし土中に埋没するため背面では継目地の位置がずれているものは多かった。

**煉瓦積変則部** 東西両側橋台の背面の「凹」の字状の部分で煉瓦積が変則的に張り出している段が1ヶ所ずつ確認された。この部分は煉瓦の段数では下から45段目と46段目の部分で、隅石の段数では丁度下から9段目と10段目の境界部分になるが、この位置は第1橋台と同様で、しかも積み上げ単位が変化する部分でもある。大阪鉄道管理局の図面では張り出している部分が4ヶ所表現されている。

**不明石垣** 第1・2橋台の両方で、橋台本体の南側に接する位置で、花崗岩の間知石を布積みした翼壁（ウイング・袖壁）に挟まれる状態で海側に面する石垣を検出した。

この石垣は橋台南側の翼壁を積み上げた後、翼壁面に接する状態で積み上げられている。従って橋台付近の時間的な構築順序では後の方に構築されたことになるが、一連の工事の中で最後の工程であった可能性はある。

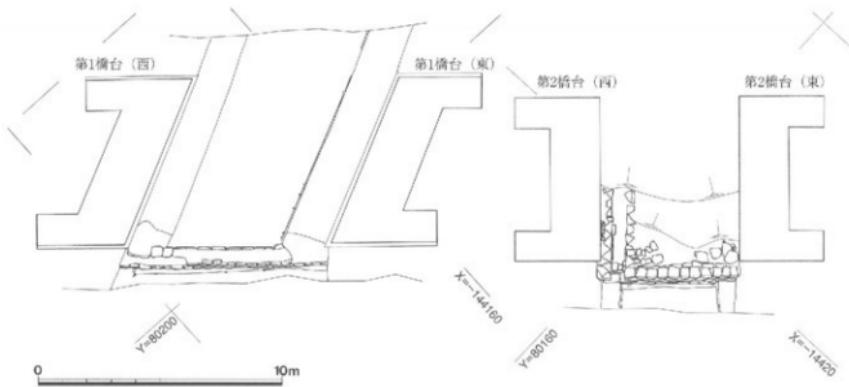


fig.81 第1・2橋台南側石垣 平面図

目地にモルタルを使用して花崗岩の間知石を積み上げているが、第1橋台では3段、第2橋台では4段分遺存していた。間知石の下にはコンクリートの根固めや直径約20cmの丸太杭が存在することが確認されたが、土留め矢板のすぐ近くでしかも湧水が極めて著しかったことから、安全確保上コンクリートや丸太杭の最下部まで掘り下げることはできなかつた。この石垣や石垣面より海側の翼壁には背後の水抜きと考えられる土管が確認されているため、石垣と両側の翼壁に囲まれた部分が何らかの空間を形成していたことは確実で、第2橋台には水路状の構造も存在している。

現在は地下水脈が変化して湧水が激しくなっているが、コンクリートの根固め上端の標高は第1橋台の石垣で約0.4m T.P.、第2橋台の石垣で約0.3m T.P.である。これらは神戸港基準面から計測するとそれぞれ標高約1.3m、約1.2mとなり、石垣が海岸線の護岸の石垣とは考えられない。類推の域を超えないが橋台本体の南端に構築されていることと標高から判断し、台風や高潮等で海水が大量に押し寄せた際、橋台周囲の地盤の流出を防止する目的で構築された石垣の可能性も考えられる。

その後明治43年にこの一帯の海岸が埋め立てられて葺合港湾が完成した際にはこれらの石垣は道路面下に埋没し、道路側溝や路面が構築されていったと思われる。

**3. まとめ** 本調査で第1・2両橋台の基礎構造が明らかとなつたが、さらにここでは第1・2両橋台に共通する内容についても触れておきたい。

**煉瓦積標高** 3段の間知石積の上端、即ち煉瓦積が始まる部分の標高は第1橋台東側で1.14m T.P.、西側で1.10m T.P.である。この4cmの高低差は軌道敷が徐々に当時の地表面上にまで低下していく勾配の分であるが、実は第2橋台でも同じ部分の標高は東側で1.14m T.P.、西側で1.10m T.P.であり、完全に一致している。両橋台間の軌道敷の勾配は隅石1段分、即ち32cmで、さらには主桁上に線路を設置する際に碎石や枕木で微調整されていたと考えられるが、煉瓦積の基底面高が一致していることは橋台の構築にはかなりの正確な設計がなされていたことが推定される。

**使用煉瓦** 第1橋台西側と第2橋台両側に使用されていた煉瓦は貝塚煉瓦株式会社の製造と考えられている煉瓦（菱形もしくは正方形の刻印）であることは確認調査で判っていた。しかし



fig.62 第1橋台南側石垣



fig.63 第2橋台南側石垣

第1橋台東側の使用煉瓦はよく判らず、使用されていたと考えられる煉瓦を集積した部分から岸和田煉瓦株式会社製造の煉瓦（×形の刻印）と日本煉瓦株式会社の製造と考えられている煉瓦（四弁花形の刻印）が採集されているだけであった。

今回、第1橋台東側から外れた煉瓦で刻印の有無や種類も調査した結果、岸和田煉瓦株式会社製の煉瓦と日本煉瓦株式会社製と考えられている煉瓦の他、貝塚煉瓦株式会社製と考えられている煉瓦も1点であるが確認できた。このことにより、第3橋台の使用煉瓦が不明であるものの、橋台表面に使用された焼過煉瓦を除けば貝塚煉瓦株式会社製と考えられている煉瓦を主体とし、工期内に調達できなかった不足分の煉瓦を岸和田煉瓦株式会社製や日本煉瓦株式会社製と考えられている煉瓦で補ったと推定できる。また実際の構築作



fig.64  
第3橋台（東）



fig.65  
第3橋台（西）

業では全ての橋台ではほぼ同時に作業が進められていたと考えることが妥当であるが、その際にも3種類の煉瓦が各橋台に混在して積まれていない事実は、煉瓦が構築現場に搬入された際にも大きな搬入単位のままほとんど動かされていなかったことを物語っている。

最後に本調査を実施しなかった第3・4両橋台についても、細部の差はあれ基本的には同じ構造と推定できる。神戸港の物流や旅客運輸の大動脈としての役割を果たした神戸臨港鉄道の遺構である煉瓦造架道橋台の調査は、今日の港湾都市神戸の形成を解明する貴重な機会であったと言えよう。



fig.66  
第4橋台（東）



fig.67  
第4橋台（西）

## 10. 神戸臨港鉄道小野浜町下水道跡 第1次調査

### 1. はじめに

今回の調査地は、都市計画道路新生田川右岸線街路築造に伴う旧神戸臨港線の更地化工事を進めている敷地から煉瓦造りの排水路が出土したと都市計画局から連絡があり、文化財課職員が視察した。その結果、出土した煉瓦造排水路は確認調査で明らかとなった神戸臨港鉄道煉瓦造架道橋と同一技術で築造されていることが窺え、神戸臨港鉄道の一連の遺構と判断されたため、その状況を確認するための確認調査を実施した。



### 2. 調査の概要

検出された当初の排水路は、上面を鉄筋コンクリートで覆われていた。このコンクリートを除去したところ煉瓦造りの排水路が検出された。

#### 軸体の構造

排水路の軸体全体の形状は、『L』の字状に煉瓦を組み上げ、部分的に煉瓦を斜方向に積み上げている部分が調査範囲で2ヶ所確認できた。この斜方向煉瓦積みは、中央区脇浜海岸通で確認された神戸臨港鉄道南本町第1架道橋の橋桁受部にも同様なものが確認されている。

排水路の内側、排水路の起点となる北端端面には、長方形に加工した花崗岩切石を交互に積み上げた隅石がある。煉瓦はイギリス積みであった。

#### 隅石

排水路の北両端には、軸体の保護と強化の役割を果たす隅石がある。隅石は、長方形の花崗岩切石を交互に組み合わせたもので、隅石と隅石との間に煉瓦が5段挟まる。

西側面北端の隅石は鋭角（槍角）に、東側面北端の隅石は鈍角に仕上げられ（菱角）、これに沿って煉瓦も棗み上げられている。

#### 使用煉瓦

煉瓦の規格は、若干の誤差はあるものの概ね長辺約22cm、短辺10.5cm、高さ5.5cmで、『△』の刻印があった。この刻印は貝塚煉瓦株式会社のもので、同社は、明治40年に大阪窯業株式会社に合併している。このことからこの煉瓦を使用した排水路は、明治40年以前

の築造であることが窺える。

**基礎部の構造** 車体の荷重を地盤に伝達し支える基礎部の構造は、地盤上に直に軽体を載せる直接基礎で、基礎底面は2cm大の円礫を混ぜた厚さ35cmのモルタル上に花崗岩切石を1段並べたものでこの上から煉瓦を積み上げている。

基礎面から高さ62cm（煉瓦10段）までは、幅80cmで積み上げ、これから上段は、6cm控えて幅74cmで高さ1.2m（煉瓦20段）構み上げている。

基礎部の底面は、標高0.1～0.15mで、砂地に接しており、湧水が激しい。

**構造過程** 下水道予定地の砂地に基礎底部構築用の板材で型枠を組む。この規模は、幅3.3m、深さ35cm、延長20m以上の型枠に、2cm大の円礫を混ぜたモルタルを流し込み、下水道の底面を造る。排水路の内寸を決め、長辺45～60cm、高さを30cmに整えた花崗岩の切石を幅1.2mで1段並べ、内側の組み合わせの目地をモルタルで整える。北端に花崗岩の切石を起き、イギリス積みで煉瓦を幅80cmで5段積み上げる。その上の北端に花崗岩の切石を積み、イギリス積みで煉瓦を積み上げ、基礎下部構造が完成する。

さらに同一工法で上部構造を積み上げるが、6cm控えた74cm幅で積み上げている。北端の最上段には、花崗岩の切石を並べ排水路を完成させている。

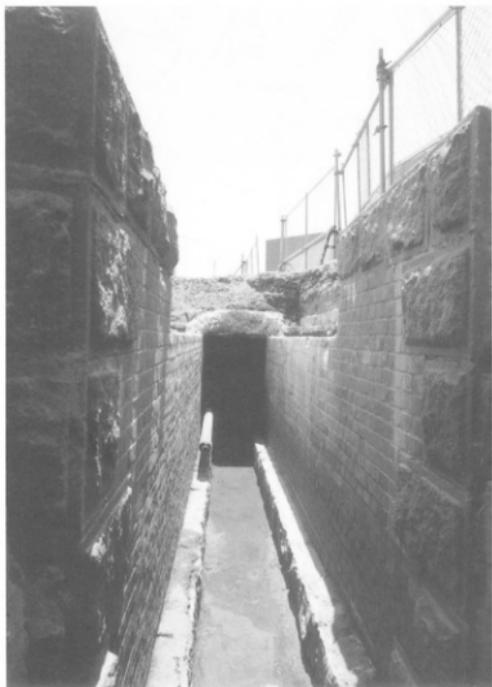


fig.69 水路部分（内部）



fig.70 水路内 隔石・煉瓦



fig.71 煉瓦刻印

3. まとめ 今回の調査で検出された煉瓦造下水道は、使用された煉瓦の刻印から明治40年までに築造されたものであることが明らかとなった。煉瓦の積み上げ方や隅石の組上げ方などは、調査地の東方で確認された神戸臨港鉄道煉瓦造架道橋台の技法とよく似ている。

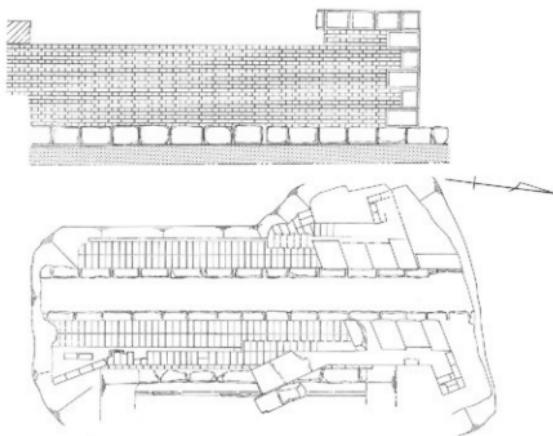


fig.72  
水路 平面図・立面図



fig.73 水路部分（上面）

築造時期と築造技術から神戸港築港の先行事業として海陸連絡輸送路の確保を目的に建設された神戸臨港鉄道の関連造構であり、特に神戸港駅の関連造構である可能性が高く、竣工当時（明治40年）の姿をよく残した下水道であることが明らかとなった。

神戸港の物流や旅客運輸の大動脈としての役割をはたした神戸臨港鉄道の関連造構である煉瓦造架道橋台とともに、今日の港湾都市神戸の形成を物語る一遺産として貴重な発見となった。今後、構造の特徴と築造当初の姿を良く残す部分について、切取り移設することにより保存することが望まれる。



fig.74  
水路壁体背面



fig.75  
調査地遠景

## 11. 熊内遺跡 第6次調査

### 1. はじめに

熊内遺跡は平成2年に初めて存在が確認された遺跡である。これまでの調査から、弥生時代後期の集落と、それを囲む二重の環濠が確認されている。また、縄文時代早期の竪穴住居や、古墳時代後期の土坑墓・木棺墓も見つかっている。



### 2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅の建設に伴う発掘調査で、既存建物によって損壊を受けている部分を試掘調査によって明確にした後、遺跡の存在する範囲について調査を実施した。

#### 基本層序

上層より、盛土・擾乱、淡灰白色砂質土（旧耕土層）、淡灰茶色砂質土、淡茶灰色砂質土、乳灰色砂質土、黒灰色砂質土（遺物包含層）、乳灰色石混じり砂質土（遺構面）、乳灰褐色礫混じり砂質土、乳茶黄色礫混じり砂質土となっている。調査区の南側は黒灰色砂質土、乳灰色石混じり砂質土層の堆積が厚く、北側は遺構面が削平されていた。

#### 検出遺構

溝2条、土坑12基、ピット数十基検出した。

#### 溝

S D01は調査区を北から南に継断する。幅0.6~1.4m、深さ10~30cmを測り、埋土は黒灰色砂質土、乳灰褐色石混じり砂質土である。奈良時代の須恵器壺・蓋、土師器壺が出土している。北側は削平によって幅が狭くなっている。

S D02はS D01と並行する。幅1.1m、深さ20cmを測り、埋土は黒灰色礫混じり砂質土、茶褐色礫混じり砂質土である。S D01とS D02の間は5.4mを測る。道路状の遺構である可能性が考えられる。

#### 土坑

調査区の北側で多く検出している。ほとんど遺物を含んでおらず時期は不明である。

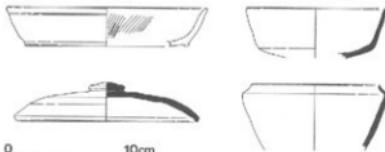


fig.77 S D01出土遺物実測図

**ピット** 調査区の北端と南端で多く検出している。直径0.2~0.5m、深さ10~40cmを測る。遺物はほとんど含まれていないが、弥生時代後期の土器片が確認できることから、直径の多いさからも大半のものは、弥生時代と考えられる。

**3. まとめ** 調査地は比高差1.3mもある斜面地に位置するが、弥生時代後期の遺構と奈良時代の遺構が確認できた。これまでの調査で検出された環濠を延長すると、調査地は環濠内に想定できるが、弥生時代の遺構はピットが数基にとどまり、遺物も少量であった。

また、奈良時代の遺物は第3次調査でも出土しており、今後この遺跡内で調査がすすめば、建物等の存在が確認されると考えられる。遺構の詳細な時期については、遺物整理が進んだ段階で言及したい。



fig.78  
調査区平面図・断面図



fig.79  
調査区全景

## 1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、旧湊川沿いの段丘上に位置している。縄文時代後期の貯蔵穴が確認された他、弥生時代には西浜平野の拠点集落となっている。その後、古墳時代後期にも集落が存在している。また、平安時代末期以降に成立する中世前期集落も存在し、福原京との関連も注目される遺跡である。



fig.80  
調査地位置図  
1:2500

## 2. 調査の概要

### 基本層序

基本層序は、盛土、灰色砂質土（上面が中世後期～近世と思われる遺構面となる）、黒灰色砂質土（上面が第1遺構面となる）、暗黄褐色砂質土（上面が第2遺構面となる、地山）である。

### 検出遺構

調査は平安時代後期（12世紀）の第1遺構面と、弥生時代中期の第2遺構面で実施している。

### 第1遺構面

第1遺構面では、柱穴から12世紀の須恵器碗が出土した掘立柱建物等を検出した。

#### S B101

南北5間以上×東西2間以上を測る、総柱の掘立柱建物である。

柱間は2.0～2.2mで、建物を構成する柱穴は幅30～40cm、深さ20～35cmを測る。建物方位は、座標北から約38°西へ振っている。

掘立柱建物を構成するS P110から12世紀の須恵器碗が出土しており、建物の時期も判断できる。

#### S A101

東西方向に4間以上続く柵列である。柵列間は2.0～2.2mで、柵列を構成する柱穴は25～40cm、深さ20～35cmを測る。柵列の方位は、座標北から約52°東へ振っている。

柵列の時期が理解できる遺物は出土していない。S B101と切り合っており、同時併存ではないが、建物方位が似通っている。おそらくS B101とほぼ近い時期だと考える。

#### S D101

調査区の西端で検出した小溝である。幅約35cmで、深さ約10cmを測る。時期の判る遺物は出土していない。

S B101を削平しており、それより新しい。遺構の上面が中世後期～近世の遺構面となる灰色砂質土により覆われており、中世の範疇に収まる事は理解できる。



fig.81  
南半調査区全景

第2遺構面

S D 201

第2遺構面では、弥生中期の土器を多く伴う方形周溝墓と堅穴住居等を検出した。

方形周溝墓の周溝だと考える。幅2.5~4.0mで、深さ約1.4~1.6mを測る溝である。

ほぼ南北方向から直角に近く屈曲して、東へ延びている。溝の南北方向部分は東西方向部分より規模が大きく、幅約4.0mで深さ約1.6mを測り、断面V字形となっている。

弥生中期後半の土器が多数出土しているが、すべて小片であり、供献土器は出土していない。

S D 202

幅約30~50cmで、深さ約10cmを測り、南北方向へ延びる溝である。S X 201内から始まり、S D 201で途切れる。弥生土器の細片が出土している。

S D 203

幅1.4~1.6mで、深さ約0.6mを測る溝である。S D 201に接して、その北側で検出された。弥生中期後半の土器が多数出土している。

S D 201と同じく、方形周溝墓の周溝となる可能性も存在する。ただし、その大部分が調査区外へと続くため、詳細は不明である。

S B 201

おそらく円形となる堅穴住居である。東半は調査区外に続き、北半はS D 201により削平を受ける。径約2.0m以上で、深さ13~17cmを測る。周壁溝が存在しており、幅13cmで、深さ約5cmを測る。

柱穴は3ヵ所確認している。P 1は床面から検出され、堅穴住居に伴う可能性が高いが、他の2ヵ所の柱穴は堅穴住居に伴うか不明である。P 1は幅約30cmで、深さ約54cmを測る。

弥生中期後半の可能性が高い土器が出土している。

S X 201

南北の幅約3.6m以上を測る、落ち込みである。深さは約16cmでフラットな面を一度形成し、再び約40cmの深さでフラットになる。堅穴住居になる可能性は存在するが、判断はできていない。遺物は、弥生中期後半の土器が多数出土している。

S K 201

東西幅約52cm、南北幅約116cmで、深さ33cmを測る不整円形の土坑である。弥生土器の細片が出土している。

S K 202

幅130~136cmで、深さ37cmを測る円形の土坑である。弥生土器の細片が出土している。

S K 203

幅60~64cmで深さ21cmを測る、円形の土坑である。弥生土器の細片が出土している。